

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第八十三卷第十号
日本幼稚園協会



10

改訂日私幼式幼児運動能力簡易検査法による

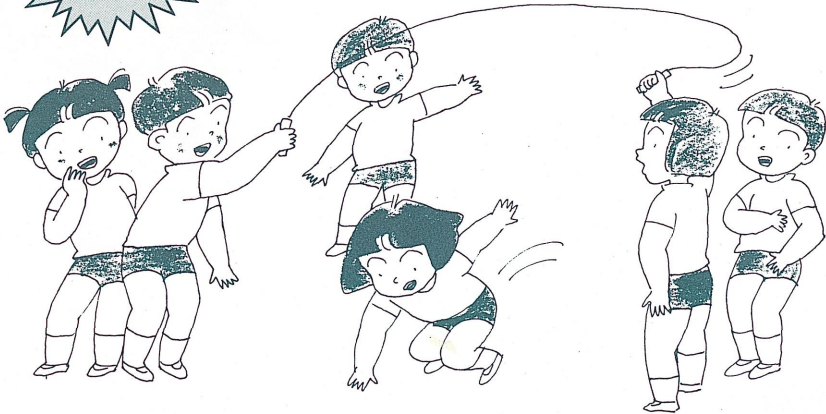
保育に生かす 運動能力検査

日本私立幼稚園連合会・編

最近の子どもたちは、体格がよくなったが、
体力がおちているといわれていますが！
先生方の園では……？

- 子どもの運動能力の発達を判定する検査法をわかりやすく解説。
- 検査結果を保育にどう結びつけ、生かしていくか、その運動あそびをイラスト入りで紹介。

新刊!!



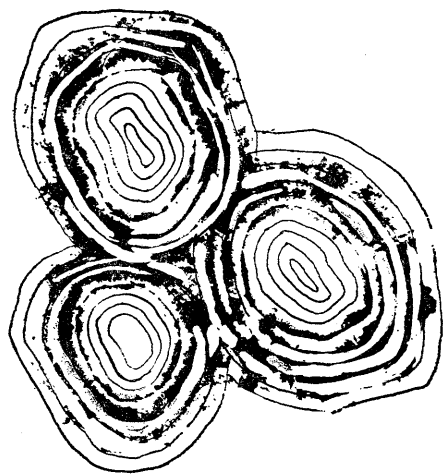
B5判・136頁・定価1,300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心を大切に 子どもの明日を考える
キナープツクの

フレーベル館

幼児の教育



第八十三卷 第十号

幼児の教育 目次

— 第八十三卷 十月号 —

© 1984

日本幼稚園協会

これからの幼児教育……………河野重男(4)

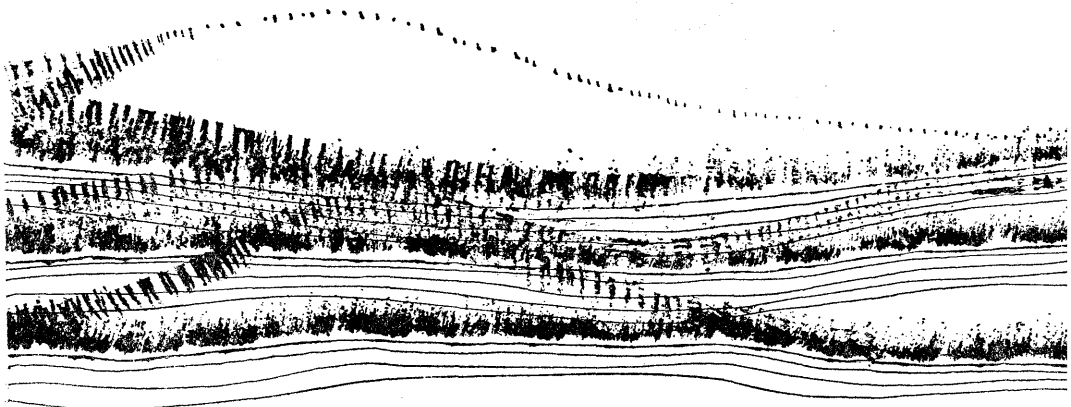
私の幼児教育論(上)……………高杉自子(6)

私の保育……………鈴木知子(14)

★子どもと衣服

園服再考……………入江礼子(20)

子どもが園服を脱ぐ時……………宮里暁美(26)



園服史におけるエプロン点描……………森下みさ子…(30)

幼稚園の制服……………田中三保子…(34)

兔園隨筆②

幼稚園の制服……………蕪木寿江…(36)

神賀忠吾氏の世界 (Ⅱ)……………江波諄子…(39)

宗教人類学からみた子ども(1)……………関一敏…(48)

——怪物の話——

近代短歌に現われた子ども (十九)……………大塚雅彦…(56)

表紙 紙・安井 淡

表紙題字・比田井和子

カット・福田 理恵



これからの幼児教育

河野 重男

昨年十一月に、中央教育審議会教育内容等小委員会の「審議経過報告」が発表されました。これは、時代の変化に対応する教育内容のあり方について検討したもので、いわば二十世紀への教育のあり方を探求したものです。

二十一世紀へのわが国の社会的变化を的確に予測することは困難なことです。が、いずれにしても「不確実性の時代」ともいわれるほどに、これまで直面したことのない新たな変化や課題に取り組まなければならない社会であることだけは確かでしょう。そうした社会で要請されるのは、端的に言うて、主体的に変化に対応できる個性的な人間の育成だということになります。

この観点に立って、「報告」では、これからの学校教育のあり方、したがって教育内容のあり方を考えていくうえで、

特に重視しなければならない視点として、「自己教育力の育成」ということを強調しています。このことは、幼児教育としての幼稚園教育のあり方を問い直すうえで、じな視点だと思えます。

「報告」では、自己教育力を「主体的に学ぶ意志・態度・能力」としてとらえ、「学習への意欲と意志」「学習の仕方の習得」「生き方の探求」を内包する視点として強調しています。さらに、この自己教育力ということに関連して、「報告」のなかで、基本的生活習慣の形成ということが強調されていることに注目したいものです。

基本的生活習慣ということとは、とかく「きまりを守る」とか「箸が使える」というように狭くとらえられがちですが、もっと広義に学習の態度ともいうべきものを含んでいる

ことがだいじだと思えます。つまり、何事にも積極的な関心と好奇心をもってそれを学習しようとする旺盛な意欲と、それを最後まで追求していつてやり遂げようとする強固な気力とをもつことを基本的な生活習慣としてだいに考えようというわけです。

このことは、最近の子どもについてよく言われる「無関心」「無気力」「無責任」の傾向の増大と表裏の關係にあります。こうした傾向が見られることは、さまざまな調査によっても確かめられていることですし、二十一世紀に生きる子どもという視点からは、このことは、まさしく大問題だと言わなければなりません。

旺盛な意欲と気力と責任性とを基本的な生活習慣として身につけさせることは、幼児期から小・中・高等学校の段階を一貫して配慮されなければならないことですが、とりわけ、幼児期と小学校低学年段階がこの課題達成にとって決定的にだいに時期だと言えます。幼稚園や最近の小学校における体験的学習の重要性の強調、家庭教育面での手伝いやテレビ視聴の問題、さらには地域社会における遊びの回復の問題なども、こうした視点から見直したいものです。

。。。。。。。
ここで、倉橋惣三先生の次のような主張に注目したいと思います。先生は幼児教育の目標という点について「神経が健全で、強健な子供をつくる。困難に打ち勝って疲れず、所信と使命を実行して行き得る人間、これこそ現代が要求している人間だ、と言いつておられます。そのために、方法として次のようなことを強調されました。

自然に子どもを触れさせる、戸外保育を重視する、このことが困難に打ち勝って疲れずということにつながっていく。また、子どもを机から解放し、小さな手仕事から大筋肉を使つていく方向へ方法を変えていく。さらに、神経質に生活を細切れにし時間を分割することを避けて幼稚園生活のスケールを大きくしていく。そして、結局は、「自由感を大事にしなげら、同時にそれを並んで仕事において精神感を持たせる」等々。

「自由と精進」。まさしく未来を洞察された倉橋先生の現代の幼稚園教育に生きる名言なのではないでしょうか。

(お茶の水女子大学)

私の幼児教育論(上)

高杉 自子



保育実践論を書くことをお引き受けしたものの、自分のザンゲ記録というか悪戦苦闘の反省記録の域を脱しないことを始めにお断りしておきたい。

教師生活の滑り出しは小学校教師、幼稚園に配置転換させられたのは昭和二十二年だから、それから数えると三十七年になる。

でもその頃、自分には納得できなくて、三ヶ年で小学

校へ戻してもらった。その子供達は幼稚園四歳から六年生まで八年間受持ち、卒業させて、再び配置転換を命じられ、本格的に幼稚園教育に取り組んだのは昭和三十一年からである。クラスを持ちながらの主任、教頭の九年間を過ぎた。それこそ小学校教師から幼稚園教師への転換、脱皮のために精一杯の苦しい九年間であった。若い先生方から二言目には小学校的と言われ、どうすれば、

幼稚園的なのか、さんざん悩んだものである。

幼稚園的と認められるまでの過程は長く、前者から、脱皮するまでは、かなりの年月を要した。もしかすると、まだまだ本物とは言えないかもしれない。その道程は遠く、これからも続くであろうと思うのである。

先日、ある幼稚園で研究保育をみてショックを受けた。

その先生は、教師三年目になる。子供に体当りしてかわる、よく考えながら保育をしているし、よく反省もしている。子供を引っ張ることに抵抗をもち、指導するという言葉を使うのも厭がっていた先生なのである。

ところが、その日は、ザリガニをOHPのパネルの上のせてクラス全員の子供たちに見せ、形をとらえさせ、各グループに、一匹ずつパックの上のせたザリガニを配った。更に八つ切りの画用紙と細いサインペンを一人ずつに渡してザリガニの観察画をかかせた。すぐに取りかかれたのは各グループ一二人位、三分の一は立往生してしまった。

私は、この先生の保育をみて、まるで別人かと疑いたくなるような気持ちにかられた。どうして、このような計画が浮かぶのか不思議であった。引っぱるのが厭だと思う人が、「セエーノ」と子どもを揃え、同一条件を提示して無理やりに追い込んでいくことに自己矛盾を感じないのであるか。このような保育では教師の助言は、表現技術に限られていくのだが、どうして気づかないのか、と理解に苦しんだ。子供の苦悩にみられる表情も気づかず、仕上がった絵だけを気にしている先生を見て、なぜ、こうなったのか、と考えた。案外これが教えることの原型というものであり、教育とか、指導とかの言葉からくるイメージは、このようなものなのかもしれない。この方法がずっと簡単で、やさしい。だから、幼稚園教育は分りにくいと言われるのではないかと思った。それに、午後の研究会で小学校教師上りの指導主事は、系統的な授業でよかったと評したのを聞いて、授業と保育のちがいを思い知らされた感があったのである。

子どもが見えてくるまで

昨年十一月に中央教育審議会内容等検討小委員中間報告の中に、学校教育の硬直化画一化が問題点として指摘されたのは衆知のことであろう。

実は、この画一化や硬直化は幼稚園教育の中でみられる問題点でもある。特に学校といわれ、それが科学化され、分析的になればなる程、形式化が進んでいくのである。

つまり、ベテランの先生といわれる人が、管理的な授業を行う。即ち混乱を起さないために計算しつくされた指導案に従い、しぼられた目標に向って、統一された内容方法を限定し統制のもとに学習活動を展開させる。一糸乱れない授業、水も漏らさない授業をよしとされるのであるが、果してどうであろうか。子供たちの考える余地がない、自分で考え疑問をもち試すこともできない授業で何が子供に身につくであろうか。大人から言われた通りの一つのメニューの食べ方しか知らない、あるいは

決ったレールの上しか走れない子供を育ててしまうのではないか。次第にそこには問題を感じなくなり、現在の学校教育はますます管理的にエスカレートしてしまいう傾向にある。そしてここに問題を感じないところに画一化、硬直化の原因があるのではないか。

ところが、恐しいことに、この傾向がそのまま幼稚園教育に下りてきているのである。

学校であるとか、教育であるとか言うことが、この傾向を定着させつつあるのではないか、実は、私は、この考えとの戦いの連続であった。

それは、ねらいとか内容にしばられることにある。何を教えるかということばかりが頭を一杯にする。幼稚園でいえば何の活動をさせるか。という観点だけでしか活動を見ないので、子供が見えてこないのだ。具体的に言えば、砂遊びをしている、鬼遊びをしている、かけっこしているという活動が見えれば安心して、それ以上見ようとしなくせがついてしまっている。一斉に活動している時は、教師の示すままに活動しているかどうかしか見

ない。それすらも見ないで提示だけして自分の言うことを聞いているかどうかだけを見るくせがついている。しかも教師が決めた限定した内容をいかに立派に伝えるか、それが系統的であるとか構造的であることが価値的であると考える。しかも多くの場合、この系統も構造も教師側からとらえたものでしかない。それで果してよいのであろうか。

この場合、学習者、即ち主体者である子供が忘れられていないか、内容を身につけなければならないのは子供であって、その学習者の立場に立たなければ何の意味もないことになる。それが忘れられることに、大きな問題が起きた。落ちこぼれを作ってしまった理由もそこにあるのではないか、と思うのである。

ところが、子供が見えることは大変なことなのである。表面的にはいくらでもとらえることができる。何の活動をしているか、どういう行動をしているか、は見ればわかる。しかし、それは、本当に見えていないのではないか。子供が見えるということは、子供の立場に立

ち、子供がみていること、子供が考えていることが伝わってくることである。子どもの喜びや悲しみというような感情も「おもしろそうだ」「やってみたい」「何だろう」などというような興味や願望、疑問、発見等も通じ合うことである。教師と子供の間には、共感や了解が成立する関係になることであらう。

共感の成立

共感が成立することは、そう簡単なことではない。まず子供がありのままの自分を相手の大人に委ねることができるような信頼関係が基盤に必要である。

私は始め、教師と子供は簡単に信頼関係が成立するものだと考えていた。

入園当初、泣いて厭がる子供も親からひきはなすことによつていち早く自立の一步を踏み出させることができると考えていた。そして幼稚園での生活のし方を一通り教えこむことによつて、幼児は理解して行動できるようになる、それが安定であり、幼児が喜んで登園すること

になると思いこんでいた。つまり、それは幼稚園側から考えた子供に対する注文にしか過ぎないのである。お恥しいながら子供がどのような気持で登園するかを考える余裕はなかったようだ。「どのように適応するのか」が問題であった。

実際に、子供たちは、からだ全体でさまざまな抵抗を示した。拒否や反発、あるいは殻を閉じて敵として受け入れない子供がいる。それを適応しにくい子供たちというような十把一からげの解釈としていたようだ。

子供からみれば、いくら教師が母親にかわる存在であるといっても、そう簡単に納得できるはずはない。事実降園の時、母親の顔を見ると、今まで泣いたりつまらなそうにしたりしていた子供たちの表情がほころんで母親のふところへ飛びこんでいくのである。そのうちに、教師だけしか頼る人がいなくなると諦らめた結果、自分を出してもかまわないと気づくようになるのである。

このような事実を目の当りに見て、私は、子供が自分を出すことができるまでにはかなりの時間かかることを

知らされた。そして、「先生、私のないしょのお話をするね」と耳もとでささやいてくれるようになる頃、ようやく、自分との間にきずなが結ばれることに気づいた。

自分が出せるようになることによって、共に感じ合う喜びを味わうようになる。子供の感覚は鋭く、この人は自分の味方であるかどうかは、かなり早くみつけれらしい。いくつかの経験の結果、信頼感が成立していく。それができると子供は、その人の多くを受け入れようとする。つまり相手との間によりやく共感が成立していく。

しかし、大人と子供との間には、共感したと思ってもかなりズレが起る。このズレを教師が感ずることが大切であるが、とかく子供のせいにして、教師は強引に自分の方へ引っ張ろうとする。むしろズレを大切にして、その原因を追求したり埋める努力をすべきである。

教師はそうした感性をときすまさないなければならないが、それには教師の自己訓練の結果獲得できるものではないかと思うのである。自分に非を認める謙虚さが必要

であって、これは絶えず努力しなければ、すぐ我田引水に戻る不安定さをもっている。自分を上位に置くのではなく、子供を主体として考えることに徹しなければならぬ。

一人ひとりの子どもが育つために

私は幼稚園教育の中で、自分の発想を転換せざるを得ないいくつかのことがあった。その一つは「一人ひとりの子供はそれぞれ異なる。だから一人ひとりに応じた教育が必要である。一人ひとりの発達を保障しなければならぬ。十把ひとからげでは駄目なのだ。」ということである。

子供一人ひとり、それは、かけがえのない命であり、この世にたった一人しかいないのである。すべては、その子にとって必要なことか、どうかを考えてやらなければならぬ。このことは一斉指導に慣れた私には大変なことであった。もっとも小学校だって同じなのであるが、小学校教師の時は、わからない子供がいたときは、

その子供のせいにして過してきた。同じ教材を与えてついでこない時はどうかみくだいて教えるか、だけしか考えなかった。教材をやさしくすることを工夫するだけであつた。

ところが、幼稚園では、そうはいかない。子供のわからないとかできないとかは、まずなぜかという検討がつかないのである。子供が泣く、という現象は同じでも、その一つ一つの対応は全く一人ひとりがわなければ相手は泣きやまない。しかも、あの手この手とあらゆる智慧を絞って試みた末、ようやく受け入れてくれるものが見つかる。

缺一つだって、見るだけで泣く子供がいたのはショックだった。つまり、内容を易しくくだく前に、その子供の感情をさぐらなければ、コトは解決していかない。その子の気もちにくいこまなければ相手はこでも動かない。その表現も方法も全く一人ひとり異っていて、教師はその一人ひとりの対決を迫られている、ということに気づいたのである。

ごく当り前のことであるけれども、私には大切な発見であった。人間一人ひとり、性格も生い立ちも、そして力も異なる。それに直面して、「その子供にとっての必要さ」を見つけないければならない教師の仕事のむずかしさには、正直いってお手あげの感があった。そして、このことが私の教育観というか保育観をもつうえに役立ったと思っっている。同じことを教師が与えても一人ひとりの子供にとっては意味が違ってくる。同じことを与えることで、教育を保障したと多くの人は、考えるけれども、相手が消化してくれなければ何の意味もなくなってしまふ。同じことを与えることには、どんな意味があるのであらうかという疑問がでてきた。もう一度教育を始めから考え直さなければならぬ。そして、今まで教師側からだけ考えていたけれど、子供からみて、どんな意味があるのかを考えなくてはならないと、思ったのである。

同時に揃えることに、あくせくしていた自分が、みっともなく見えてきた、何よりも、子供たちに本当に済まないと思つた。自分の手腕の足りなさを他の人からみら

れるのが恐しくて、恰好ばかりつけたがった自分を心から恥かしいと思つた。

揃えることのできることは本質的な指導技術ではないという間違ひにも気づいた。それに気づくことによつて、幼稚園教育のよさ、すばらしさがわかつてきた。教科書のない幼稚園。幼児一人ひとりが、その子供の自分のテンポで育とうということを十分に認められる場として用意されている幼稚園教育のすばらしさに、舌をまくようになった。

これは幼稚園教育の独自性でもある。他の学校の真似をすることはない。幼稚園教育だからこそできることなのである。一人ひとりが見える学校とは、何てすばらしいことではないか、集団の中に個を埋没させるのではなく、個の育ちを確かにするために集団が必要なのである。

個と集団

では幼児期に集団生活をさせる意味はなんであるか。一人ひとりの幼児が自分のやりたいことをやるだけ

では足りない。つまり幼児が自己発揮したり、自己表出することによって自分の心を開くとともに、その中で多くのことを受け入れ、学んで身につけていく。このことは幼児自身の内にある願いである。

しかも、人間は人間同士がかかわり合いたい、そして互いに高め合い学び合いたいのである。こうした欲求は人間として生きるための欲求である。

その欲求の実現のためには、自分を無条件に受け入れる家庭だけでなく、多くの場で挑戦していききたいのである。

幼稚園は、そうした欲求を実現させる場である。自分に近い同じような子供たちが集って、仲間を作り、互いにモデルを求めて育ち合い学び合う場なのである。

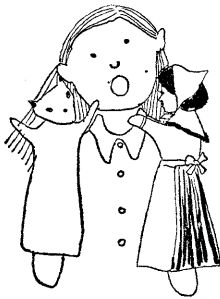
人間は一人ひとり異なるけれども、同じような、というか、共通な足どりで発達していく。

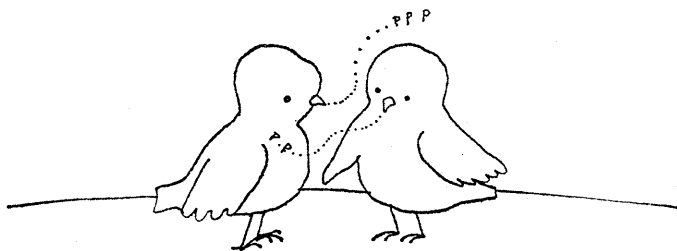
したがって細かくみれば興味の対象や示し方は異なるが、大まかにみればかなり共通したものである。例えば移動が可能になると言い、這えば立ち、そして歩く、さ

らに色々な方法で運動していく、というようなことは共通の筋道である。人間に興味をもち始めるころになると、「いないいないばあ」から始めて、逃げたり追ったりすることを喜ぶ。子供の仲間ですれを行うときには、しだいにルールや役割をつくって遊ぶようになる。興味の対象は身の廻りから未知なるものまで輪をひろげるといえるように共通するのである。

つまり幼稚園に集まった子供たちは夫々個々に違っても、共通溝をもっている。個が育つためには、そうした関係をもつ集団が必要なのである。

(文部省初等教育局視学官)





私の保育

鈴木知子

五月十八日

一週間ほど前、M子から「せんせい、わたしの大五郎もらってくれない？」ふいに声をかけられ、驚いた。「あのね、おばあちゃんにかつてもらったヒヨコのなまえが大五郎っていうの」「オスなんだよ」「うちのおかあさんもおとうさんも、大きくなったからおうちにおけないっていうの、だから、困っているの」「せんせい、幼稚園につれてきていいですか」

少し理解できた私は、「Mちゃん、大五郎が幼稚園に
いるとうれしい？」と聞いた。M子はすかさず「うれし
いよ」と、答えたあとで、「ほんとうは、おうちにおき
たいんだけど、マンションではおけないから、だれかに
あげなくちゃいけないの、かわいそうな大五郎だね」大
五郎の行くえを心配して尋ねる子に同情した。「それじ
ゃ、やなぎぐみで育てようか」「せんせい、ほんとにい
いの、せんせいありがとう、わたし、一生懸命お世話し
ます」。ひとりっ子で、なかなか友達に恵まれなかった
M子だが、積極的に自分の意志を伝えたり、友達の中
ですんで入りこめる。大人の会話にも敏感で、両親のや
りとりを見聞きしては心を傷めている時もある。

「せんせい、いちどおうちに帰ってから大五郎をつれて
きます」「よろしくおねがいます」「まだ、小さいから
ダンボール箱にいれてるの、寒くだけしないでね、おう
ちの中においといたから、寒いと風邪ひいちゃうでし
よ」「きれいな水を時々とりかえて、えさは、わたしが
もってきます」飼い方まで教えておかないと、と心配す

るM子の表情は、まるで大五郎の母親でもあるかのよ
うな心づかいである。「はい、わかりました」

安心したのか、スキップで外にでかけていった。

その午後、母親と一緒に、少しトサカがみえるように
なったヒヨコをつれてくる。

ピヨピヨと、鳴くかん高い声を少し押さえるかのよう
にして、「せんせい大五郎です。よろしくおねがいしま
す。えさは、この袋の中に入っています。このお皿にあ
げてください」赤くふちどりされた灰皿をお皿にして
いる。「抱く時は、このタオルに包むと気持よく寝ます
から」クリーム色のM子の大好きなタオルを大五郎の
毛布代りにおろしたらしい。母親は、ただ「すみませ
ん」を繰り返す。M子の方が、要領よく説明をしてい
る。そして、最後に「夜はひとりぼっちなのね」と、つ
ぶやく。「だいじょうぶよ」、「兎のクロちゃんも、ミー
ちゃんもいるじゃない、みんなお友達になっちゃうわ」
「そうだね、クロちゃん、ミーちゃん、よろしくね」心
残りがありそうだが、「またあしたね」と、手を振りな

がら帰って行った。M子は大五郎を救うために必死だったのだから。少しでも孫の気持を満してあげようと買つて与えたおばあちゃんは、ヒヨコの先々まで予測することはできなかったらしい。M子は大五郎を通して、生きものを育てることのむずかしさも味わった。

こうした体験から、「どうしてヒヨコがいるの」など、クラスの子どもの達の質問にも、すすんで説明をするM子であった。昨年、同じようにして兎のクロをつれてきたY夫は、「ぼくだってクロをつれてきたんだよ、ね、せいせい」と、思い出したように話す。

子ども達の仲間に、観察用に、として保育の中にとり入れられるものもあるが、前記のように、不意にとびこんでくる例も少なくない。幼稚園で、これ以上は、と体裁よくお断わりすることもあるが、子どもの気持を知ることが故に、断わりきれない場合が多い。

子どもの理解者として、情緒の安定や活動の取り組み方などに効果を上げるものであれば……と思えばこそ、飼育のむずかしさを問うことより、受け入れることの方

の大切さを選んでしまう。「生きものを通して、何が育てられるのか」と、聞かれることもある。形として、すぐ効果を望むのは無理であるが、日常生活に喜怒哀楽があるように、生きものの情感までを観察できる子ども達もいる。

「うさぎの耳は、こんなにあったかいよ」、陽ざしの強い所に置きざりにしていた兎を見つけたO子が、「せいせい、クロちゃん苦しそうだよ、日射病になっちゃやよ」と、動悸の激しいように驚いて教える。

「きうはニンジン喜んで食べたのに、今日は食べないね、リンゴの皮の方がよく食べるね」——「ウンチがやわらかいね、わたしもきのう下痢してたの、ミーちゃんとおなじよ」——「せいせい、この頃大きくなったと思わない、もしかしたら、赤ちゃん生まれるかもしれないよ」——「せいせい、クロちゃんのお誕生日はいつ、何才だっけ、お誕生会してあげなくちゃ、」など。動物を介しての会話もかなりみられる。食べ物の好き嫌い、食事の量、同じ動物でも性格の違いまでわかってくる。絵本

や図鑑では知り得ない体験学習をしているに違いない。

大五郎がきた翌日、友達同志の衝突があった。身仕度を整えて、すぐ大五郎を手にしたM子が、ままごとをしているA子の所に行つて、「かわいいでしょう」を連発したために、A子は、「兎のミーちゃんの方がかわいいものね」と、いう。「大五郎の方がかわいいよ、私の弟なんだから」……しばらくこうしたやりとりのあと、保育者に「せんせい、どっちの方がかわいいと思う？」と聞く。「クロちゃん、ミーちゃんは、ずーっと幼稚園にいるから、よく慣れてみんながかわいいと思つていましょう。先生もかわいいと思うよ」「じゃ、大五郎はかわいいくないの」「大五郎は、からだも小さいし、お目目も鳴き声もかわいいわよ、だけど本当にかわいいと思うのは、これからじゃないかな、M子ちゃんは、本当の弟のように優しく育ててきたからかわいいのよね。今度は、M子ちゃんの弟ではなくて、やなぎぐみのみんなの大五郎でしょう？ みんなにかわいがつていただきまし

よう。そうすると、本当に大五郎ってかわいいね、っていうわよ。「そうか」——本当の可愛いさが、形や動きだけではわからないことを理解させたい。

「ぼくは、ニワトリは弱いんだ。だって突つつくんだもの」と、近よらなかつたS夫も羽ばたきまわったり、肩に乗っている大五郎をみて、指先で背を触れてみたりしている。

一方では、カメを水槽から出しては、「ちよつとおさんほに」「運動させてやるんだ」と、中庭や積木で作つた家の中につれだす。一年間水槽に手を入れることがなかつたK男が、年長組になつてから、よくカメに親しみを持つようになった。どじょうつかみにも、歓声をあげている。タニシは、どじょうと同居しあいながら、次々と子を増やし、にぎやかな家族関係を保っている。私は重い水槽の水をとりかえる度に、生きものの強さ、尊さ、神秘的なものを感じる。

五月十一日

段ボール箱を利用して、D夫は手動式飛行機を作った。ロボット式につばさをつけ、ひもを肩につけて歩ける飛行機。これが女兒にも人気があって、「Dちゃん、わたしにのせて」と、集まる。D夫は、気持よく「いいよ」と、順番に乗せる。このD夫の刺激で、段ボール箱製作がはじまった。

兎に、全く関心を示さなかったN夫が、開閉つきのドアをつけ、屋根を傾斜させ、家を作った。「せんせい、ミーちゃんのうち作ったよ」と、いう。そして、兎は嫌いだよ、と言っていたB夫は、段ボールの家の中に暗室を作り、寝室や、食事する部屋、トイレ、遊ぶ所などと、細かく仕切る。楽しい生活を、という発想だ。自分のためではなく、兎のために、という一念で作ったものだ。

実際に兎を入れてみると、いろいろな不向き、動きにくさに気付いた。そして、すぐ直しにとりかかる。かな

り、保育者に援助要請（カッター使用などで）もあったが、子ども達の設計、施行には、喜んで手を貸した。発明工夫が、どれだけ人や生き物に役立つものであるかを、よく知らせたかった。

「せんせい、やっぱり、木で作らないと無理だよ、兎はウンチやオシッコもするでしょう。段ボールは紙だから、すぐだめになっちゃうんじゃない？」材質の選択も大切だと気づく。「土を掘るように、ガチャガチャしてよ、やっぱり土が欲しいのかなあ！」

少しでも兎に生活の変化を持たせてやったり、楽しませてあげたいと考えたN夫やB夫から気づかされたことがある。「ぼくは動物は嫌いなんだ」と否定的だった子でも、また、絶対に触れようとしなかった子でも、本当は、暖かい、思いやりを持っているのだ、ということがわかった。接していることだけが可愛がっていることではないことを、子ども達から学びとることができた。

「ありがとうNちゃん、ミーちゃんも、Nちゃんありがとう、Nちゃん大好きだよっていつてるよ。」「ほんとか

なあ！」「ほく、今度はもっと大きな箱をみつめて作ってあげるからね。」一人ごとのようにつぶやくN夫。同じようなことがB夫の口からも聞けた。そして次は、大工さんのように木で作りたいことも考えている。保育者もそれに共鳴している。

生き物を扱うことの中で、衛生面、健康面を、と心配している父兄もいる。しかし、特別悪いいたづらや、危険な扱いをしなければ生き物の方もむやみに突っついたり、かんだりほしくない。可愛がる子の感触は、動物の方が早く察知できることを知らせたい。

* * *

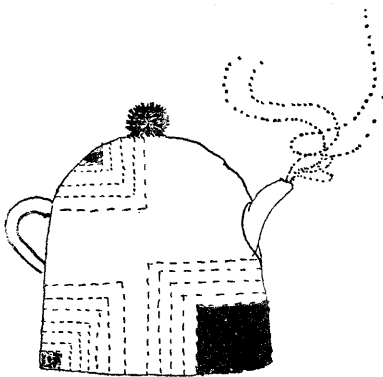
ある時は、生き物の気持を代弁しながら、子ども達に細やかな心づかいを促がしたり、幅広い視野を育てたいと願っています。

生き物との自然な対話が、心を和ませたり、理屈では解せない情感による対話の中に、本根を出しあう、生命

の豊かさが存在するのではないでしょうか。

ささやかな環境作りだと思いますが、こんな所にも何かを見いだしたい気持で、今朝も早起きしてでかける私です。

(郡山女子大学附属幼稚園)



子どもと衣服

幼児と服

—園服再考—



園服というと、我が家の長女、長男が入園の日を迎えた時のことが思い起こされる。二人共、H幼稚園に入園したのであるが、この園には御仕着の園服は一枚しかない。薄茶色の前ボタンの簡単なものである。長女が入園するまでは、それは御仕着ではなく、母親がスモックを時間的、技術的に縫えないという場合にのみ、それを求めるというようになっていたようである。それが御仕着になったのは、母親

入江 礼子

側からの要望で、写真などを撮る特別の行事の日には、揃っていた方が良いということかららしい。事の善悪はさておき、そのようになってから長女は入園したのである。もちろん一枚のスモックでは足りないもので、残りは手作りのものが望ましいとされていた。あまりにもシンプルな御仕着のスモックには、子ども達への目印を兼ねて、刺繍、或いはアッブリケなど、どこか一ヶ所手を加えて欲しいという

のが園側の要望であった。

私は、長女のスマックの胸ヨークの回りに簡単な刺繍をした。本人の大好きなピンクの糸を主体にして。私から離れるのが不安げな彼女にとっても、そういう不安をかかえた子を送り出す私にとっても、

その刺繍は、私自身の分身のようなものであった。

彼女はそれによって守られ、私もまた彼女をそれで守るといふような……。それから私は二枚のスマックを手作りした。一枚はやはりうすピンクの花柄。

これは長女と共に選んだものであり、もう一枚はうす紫の花柄であった。こちらの方は、特に彼女が気に入ったというわけではなかったのだが、家にあつた生地だったので作ったのである。そのスマックは、ヨークのまわりに白のレースの簡単な飾りをつけた。洋裁が特別得意ではない私の、これが彼女にしてあげられる最大のことであった。彼女はそのレースが気に入り、入園式後は、後者の二枚のスマックをとつかえひつかえ着て行くようになった。特に

入園当初の不安な時、母の作った服に身を固めて出るといふことは、母に包まれて出て行くことにつながるとし、母の方にも包んで出すという気持ちがある。母親が服を作るといふことには、こういう意味も含まれると思うのである。

今、一年生となった長女は、年長の末、「このスマック、もうきついよ。」とよく言っていた。「あと一ヶ月だから我慢してちょうだい。」という私の言葉に不満そうに口をとがらしていた。しかし卒園してそれが本当にいらなくなった時、私がもうボロボロになったし捨てようかと言うと、「いやだよ、これは遊ぶ時に使えらんもん！」と言って、サッサと自分の机の引き出しの奥にしまってしまったのである。或る時期自分を守ってくれたスマックは、それが用を終えた時、やはり捨てがたかったのである。

次に長男の場合。彼の入園式に着ていったスモックには、彼がブルーと並んで好きな色であるグリーンのバイアステープを胸から背中にかけてのヨークのところにつけた。ところが彼は、「これ、手のところのゴムがきつくて、僕、着ていくのやだよ。遊べないもん。」と言うのである。幼稚園とは、お友達が沢山いて遊ぶところだというイメージを確固ともっていた彼には、母がいくら好きな色で手を加えても、園服を着ること自体が気に入らなかつたのである。彼にとつては、そんな型に入らなかつたって幼稚園で充分に遊べるのである。ゴムのあるスモックなんて、むしろ邪魔だったし、自然な気持ちで遊ぶ気にはならなくなってしまう代物だったのであろう。

「どうしてもイヤなら、幼稚園で遊ぶ時は脱いでもいいのよ。」と言うと、やっとしきつと納得して、袖を通したのである。入園式が終つてかえつてきた彼は、「あーあ、今日はいっぱい座っちゃったなあ」と呟いた。幼稚園とはそんなに座つてばかりのこと

ろじゃないというのが彼の持論なのである。

その彼のもう一枚のスモックは、姉の着た御仕着のスモックである。そのスモックのピンクの刺繍の上から、彼の大好きなブルーを基調にしたチロリアンテープを貼つた。長女はそのスモックを本当に行事の日以外は着ていかなかったので、私の作つた二枚のスモックがポロポロになつたのに比べて、ちゃんと綺麗だったのである。彼はこちらが気に入る。どちらかというところ、こちらの方を着ていきたい。夏になり袖なしのスモックに衣更になつた。彼は、長女の時に作つた黄色い生地、青いクマさんの模様のあるスモックをすんなりと気に入る、これを着ていつている。

もう一枚お古でいただいた水色の無地のスモックがあるのだが、この方は、どうしてもイヤといつて着ない。理由を聞くと、「だって僕のしるしがついてないんだもん」と言う。私は、それを聞いてなるほどと思つた。長袖のスモックはたとえお古であつ

ても、丘の氣に入った何かがついていた。しかしいくら好きなブルーでも自分の印のついていないものは着ないという。よほど女の子っぽいものでなければ、着るものに対してさして文句を言う方ではない長男も、スモックには自分らしさを求めたようである。入園式当日に、スモックを拒否したのは、その型にはまることへのささやかな抵抗だったのではないかとさえ思うのである。「遊ぶ子ども」そのものである彼は、そういう園服に代表される何か得体の知れない粹やら儀式性を拒否したといっても過言ではないと思う。

* * *

さて我が子のことから、ちょっぴり目を転じて、私の目に入る近くの幼稚園の園服のことにふれてみたいと思う。

U幼稚園は、遠足で潮干刈りに行った。その日、子ども達は皆、白半袖に緑のズボンの園服に身を固

めていた。母親の一人が、「体操服も持っていきやならないから荷物が大変なのよ。」と言う。「どうして体操服を、はじめから着ていけないの？」「だって記念写真をとるでしょう。その時体操服じゃあちょっとあんまりでしょう。」私は、それを聞いて言葉を失った。写真だけのためにそんなことをするのかと……。そろっていなかつたらみつともないのだと言う親の声に、何か釈然としないものを覚えた。

次にM幼稚園、ここは、お行儀ということを重んじ女の子の親には人気の高い幼稚園である。紺色のズボンやスカートに身を固めた子ども達を見て、こういうものを着て、果たして彼らがドロドロになって遊ぶ気を起こすのだろうかと疑問に思うようになった。長男ではないが、何やら窮屈で遊べないという気がするのではないかと思うのである。まあ、それが園の目的であるかもしれないのだが……。

それとI幼稚園。これは甥の行っている公立の幼

幼稚園である。ここは、園に着くと、着ていった園服を体操服に着がえ、帰る時には又園服に着がえるのを日課にしているという。着がえという日常基本動作をきっちりと身につけさせるというのが園側のねらいであるらしい。しかし、である。甥は、それがいやで、家でのぐずりが増え、幼稚園に行きたがらなくなってしまう。それまで普通であった朝の着がえにも手間どるようになり、更には、朝、園服を着ないといつてぐずるようになってしまった。帰宅すればしたで今度は園服を脱がないといつて義妹を困らせていたのである。この頃、我が家の長男が喜んで幼稚園に行っていたので、本当に気の毒でならなかった。

幼稚園の園服のありようは、その幼稚園の在りよう全体を象徴しているように私には思える。もし、子どもが遊ぶ人そのものであるということ深く認識している園であれば、その歯止めになってしまうような園服は採用しないはずであると思う。

U幼稚園の場合、そこに子どもを入れている親も、園側も、おそらく建前とか見栄えというようなものを大事にして、子ども達は、そもそも一斉にそろわないものであるという本質を、隠すべきもの、みっともないものとして排除しているように思える。又、M幼稚園、ここもきっちりとした園服を採用した時点で、先にも述べたように、ドロコンになつて遊ぶ子どもの姿に代表される子ども像を本質的には拒否したのだと思うのである。最後にI幼稚園は、子どもが幼稚園に行きたくないと思うほどの着がえについてどう考えているのだろうか。確かに自分のことが自分で出来るというのは、とても大切なことであると私も思う。しかし子どもが、それが原因で幼稚園に行きたくないと思うほど、重点に置くのは如何なるものであろうか。もしも、園が思いきり遊べるようにと体操服なるものを採用したのであれば、その気持ちを萎えさせるような着がえ指導は少々矛盾するように思えるのだが……。

私の場合は、たまたま、そうきつちりとした園服のない園に子ども達を入園させた。この稿を起こすまでは、そのことについて取り立てて考えていなかったのであるが、これを書き終えようとする今思うことは、子どもがよく遊ぶように心掛けている幼稚園として選んだ園服としては当然そういうものになるのだなということである。又、その園ですら親の要望で、たとえ一枚であっても御仕着の園服を選定したということには、何か考えさせられるものがある。親とは、このように子どもを型にはめたがる存在なのであろうか。

一人の子どもの好み、在りようで選ばれる服は様々である。同じきょうだいでも全く好みは違う。経済の許す範囲で、それを尊重してあげたいと思うのは、私だけであらうか。こういうことは家庭で着る服に止まらず、園服と同様ではないだろうか。子どもたちは砂場で砂にまみれ、ドロッコを好み、汗をかいて走り回り、大人の何倍も活発に動き回る存

在である。そのような存在がそのまま認められず、園服という型にはめて吸収していくのが大かたの幼稚園の姿であらう。親も幼稚園も、これでよしとする風潮は、子ども本来の姿を認めていない姿勢に通ずるといっても過言ではあるまい。今ある幼稚園は、ほんとうに子どもたちにとって楽しいものであるのだろうか。園服のことを色々と考えていくうちに、ふと私の心にそのような思いがよぎったのである。

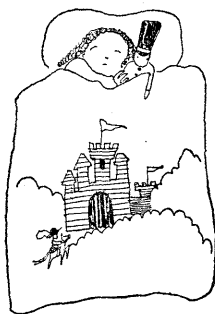
*

*

*

*

子どもと衣服



子どもが園服を脱ぐ時

宮里 暁美

誰も不思議と思わず、当り前のようにして行なわれたり存在したりしていることは数多くある。そのことにあえてスポットがあたる時、人は、ためらったりうるたえたり深く考えたり、あるいは考えるのをやめたりする。『園服を考える』ということは、まさにそのようなところがあり、思いは行きつ戻りつを繰り返している。従って全く未整理な状態ではあるが、子どもと園服のかかわりの実態をあげ、少

しでも考えを進めてみよう。

私の園の園服は、ベージュ色のスモック風のもので、そこに各自が思い思いの刺しゅうやアップリケをつけてある。超豪華な一面刺しゅうもあれば、アイロンでじゅーっとくっつけた熊さんのアップリケもあるといった具合で様々ではあるが、とにかくお母さんの心がこもっているという点では共通している。どこかにその子らしさが感じとれる楽しい園服

である。

しかし、今、園服と子ども達について思いをめぐらしている、園服を脱ぐ姿が次々に思いおこされてくる。何故子ども達は園服を脱ぐのだろう。その行為の背景・子どもの気持ちは、一様ではない。

登園してすぐ園服を脱ぐKちゃん。Kちゃんにとっては、園服はちよつと肩のこる代物であるらしい。園服を脱ぎいつものシャツ一枚になって、Kちゃんはさつそうと走っていく。

家に帰りがり、保育者のあとを歩いて歩いていたN君が、園服を脱いだのは、二学期になってからだった。ようやく友だちもできて、一緒にくり返し砂場で遊ぶようになったある日、Nは、ロッカーの前で一人園服を脱ぎ、(これでよし)という顔でひとりうなずき、ダイナマンのふりを一回してから走り去った。Nにとってこのことは、園服を脱ぐという自由を獲得したという点で大きな意味を持つ。

Kにとって園服は、家との違いをきわだたせるものであり、それが圧迫になっている。従って脱ぐことにより、Kは、いつもの自分を取り戻すことができる。

Nにとって園服は、一種の保護膜のようなものに見える。お母さんのおいのする、そして又、幼稚園全体もNを包んでくれているように感じられる。そのNが園服を自ら脱ぐことは、保護膜を破る行為であり、大きさに言えばNの新たな誕生だとも言える。

KやNにとって、園服を脱ぐということは、その行為の形をかりながら、内面的な解決をはかっている行為であった。

ままごとやダイナマンごっこをしている子ども達もよく園服を脱ぐ。

劇ごっこをしていた時のこと、狩人になった子ども達は、双眼鏡を首からぶらさげ腰にピストルをさげだすと、誰言うともなく「園服脱いでこよう」と

いうことになった。

考えてみれば、園服には、幼稚園の子、という意味合いがあるわけだから、お母さんやダイナマンや狩人が園服を着ていたらおかしいことになるのだ。

園服・カバン・帽子、この三つが幼稚園を外側から象徴している。兄について幼稚園への送り迎えに來ていた弟は、入園を待つ一年間同じようなカバンをさげ、帽子や園服を着たがる。そのことにより、弟は、少しかだけ幼稚園を体験した気分になれるのだ。

しかしいざ入園してしまえば、幼稚園は、中味が豊富にひろがっていく。あんなに胸おどらせた幼稚園らしさのかたまりのような園服もカバンも帽子も当り前のものになり、さらには、場合にに応じて不要なものになるのだ。感覚を鋭敏に働かせ遊んでいる子ども達にとっては、何を身にまとうか、ということとは重要な問題なのである。(但し園服を脱いでマントのように羽織れば、スーパーマンになること

ができる。)

子ども達は、ついには裸になる。年長組になってしばらくたったころ、男児が次々に裸になることがある。

かけっこがリレーになり、「よーし」という気合いもろともシャツをぬぎすてるM男、すると相手チームも……といった具合だったり、男同志なんだワッハッハ風のひろがり方をしたりする。

子ども達にとって、裸は気持ちの良いものであると同時に、力を感じさせたり、つながりを感じさせるものであるようだ。

脱いだ園服はどうなるのだろうか、そう考えていた時、次のような情景に出くわした。ある集まりで(子ども連れの母親達の集まり)汗だくだくで遊んだ女の子が、さあ帰るよ、という時になって、スッキリ爽やかなワンピースに着がえた。

電車に乗り遠くまで帰るといことがあってそうしたのだが、気分も少し変わり、服が人に及ぼす作

用に今さらのように気づいた。

勿論、園服を通園途中の服と見なし、登園降園時に着がえを行なわせるやり方には反対である。脱いだり着たりということは、したくてする以外は、なかなか骨の折れる仕事であるのだから。

そうではなく、子ども自身の気持ちから園服を脱ぎ、遊びほうけ、そして帰るその時になって、もう一度園服を着る、ということは、気持ち少し変わる、という意味で必要なことなのかもしれない。

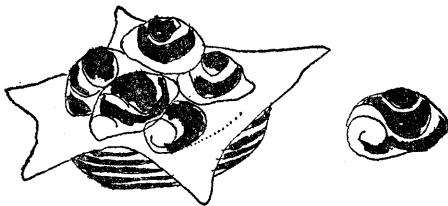
園服という字をつくづく見る。

制服ではない。制服という言葉には、規定の衣服という意味——そろっているということに価値を置いている——が強い。

園服とは、園での遊び着、ととらえるのが近いと思う。園服、どのようであればいいのか、いやその前に、あっていいのか、なくていいのか、どちらでもいいのか、果してどうなのだろう。

やはり最終は疑問符だった。もう少しこの疑問符をかかえていよう。

(文京区立本駒込幼稚園)



子どもと衣服

園服史におけるエプロン

森下みさ子

帯も解けよ、袖もちぎれよ、とばかりに着物の裾をかきあげて走り廻る子ども達の傍らに、リボンの付いた帽子をチョコンとかぶり、ヒラヒラなびくエプロンを纏った洋装の子どもの姿がある。この和洋あいまじりあう服装に彩られた園庭こそは、明治二十三年、武村藉靄女史の筆が直載に写しとった女子高等師範学校附属幼稚園の実況であった。

この実況図がいみじくも伝えるように、明治も後期になると、洋装を着飾る風潮は大人のみにとどま

らず、帽子や皮靴、セーラー服などの形で幼い子どもたちの間にも染み亘ってきていた。中でも白いエプロンは、欧米の子どもたちの風習としてとりいられるやいなや、和服や外出着の上にも好んでかけられ、幼い者の手近な洋装として愛されたようである。

大正十年、内務省の編纂になる『児童の衛生』は、和服に長めのゆったりしたエプロンを付けて、馬遊びにままごと余念ない子どもらの写真を掲載

するとともに、「児童服について」の一項を設け、幼児や児童の服が動作上、衛生上、経済上發揮すべき特質を書き連ね、実用に即した衣服を推奨する。

してみるとこの頃には、和服の上とはいえエプロンが園児たちの生活に親しくとりこまれ、同時に子ども服の実用性が人々の意識の表層に浮上しつつあったことがうかがえる。軽く柔らかく動きやすく、洗濯がきいて安価なものとして、エプロンは、汚れを厭わず遊び廻る園児らにふさわしい服装と考えられたのである。

しかし、こうした実用性とあからさまに結びつく一方で、エプロンは、園児らの動きにあわせて白く軽やかに翻えりながら、もう一つ別の「時代の声」をつぶやいていたように思われる。明治末から大正にかけての婦人雑誌や裁縫誌の端々に、胸にギャザーをたっぷりと畳みこみ、袖口、衿まわり、裾にフリルやレースをあしらひ、肩や背中にふんわりとり

ポンを結んだ、見るからに愛くるしいエプロンの作り方が紹介されているのだ。『児童の衛生』が示す幼児服の諸条件からは抜け落ちて、細やかに手をかけた装飾のあれこれが、やさしく愛らしくエプロンを飾りたてている。実用以上に装飾をほどこされたエプロン……、そこには慎ましやかではあるが、洋風文化の香りを生活の隅々にあとう限りとりこみ、幼い者が身に付けるエプロンの翻えりにも、異国から吹き渡ってくる新しい時代の風を感じとってみたい、と願う人々の想いが活きづいていたのではないだろうか。

明治四十三年、夏目漱石が著わした小説『門』には、当時を反映して、洋卓・洋燈・生活・ピアノ・パパ・ママ……と、西欧風を纏いつけた言葉がちこちに見受けられるが、「エプロン」もその一つとして登場している。そしてその翌年には、西欧文化の色香をふんだんにとりいれて時代の最先端を装っていた、東京銀座のカフェの女給たちのユニフォーム

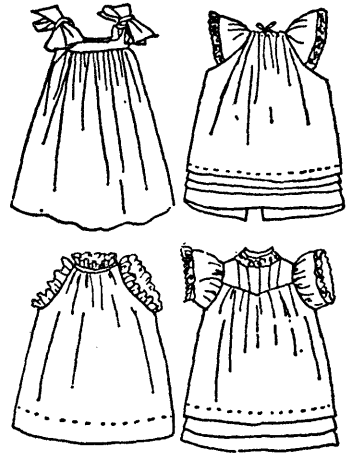
ムとして、和服に白エプロン姿が現われる。かつての鹿鳴館時代の西欧そのままの洋装に凝るのではなく、庶民の生活により親しく招き寄せられた「西欧」が、「白エプロン」という形で、女給たちの姿にやさしく馴染みやすいモダンの色彩を与えたのである。

服の和洋におかまいなく園児たちがかけた白エプロンもまた新しい時代を彩るモダンのしるしにちがひなかった。男たちが、その名も真新しい「カフェ」で、一服の憩いとともにより新しい感覚に浸る悦びを感じとったように、新時代の装いに敏感な母親たちは、愛児の姿を通して、洗練された異国性を身近に味わったのであろう。

ところで、女性用エプロンは、西洋においては十六世紀の頃より、レースの縁どりや刺繍飾が付けれ装飾品としての役割を帯びるようになり、十七、八世紀に至っては、晴着として宮廷で用いられるほ

どに、その装飾性を開花させたという。ぴったりと身体に付着させる衣服そのものではなく、もっとさりげなく、付けはずしの可能なエプロン。高価な布地を使い重厚なデザインをほどこすドレスとは違い、薄地の柔らかな、淡々しい色合の布を用い、それに見合う繊細で軽やかな飾りを旨とするエプロン。エプロンは、女性の日常の暮らしから生まれ、手軽な、それだけにドレスにはまねのできない戯れを許す、装飾品としての生命を開いてきたのだ。

園児らの小さなエプロンも、エプロンが自ずと開示してきた装飾性を、フリルやギャザーやリボンで勢いっぱい表現する。しかし、それもとりわけ女の子に快く受け継がれたのではないだろうか。フリルやリボンで飾られた女兒四人が思い思いに花を摘むグリーンハウエイ風の洒落た扉を付した『子供服の新しい型とその裁ち方』(大正十三年)は、「日本人の子供に似合う西洋の新しい型、真似損って西洋人に笑



エプロンのいろいろ
 (図は明治37年、39年の家庭の友及び43年の婦人画報による)

はれないやうに善い趣味で可愛らしくて軽快な……子供服を作らんとする人のために最も進んだ参考書」と謳いあげ、やはりいくつかのエプロンの作り方を紹介している。が、そこには「男児はなるべく飾りなどなく簡単な型がよろしい」との一句が添えられているのだ。

母親である女性は、寄せ来る洋風文化の波に自身を浸らせるだけでなく、子どもに美しく愛らしく洗練された色合を帯びさせることで、よりいっそう新しい文化の波に乗ろうとした。その際、エプロンの軽やかな装飾性は、母親の手を介して女の子により確かに受入されたのである。それは、時代の新しい美意識と呼応すると同時に、洋の東西を越えて、女性の裡に潜む装飾への想いをくすぐる何かに衝き動かされてのことではないだろうか。エプロンは、洋風文化匂いたつ時代のしるしとして、また女性に連綿と繋がる美意識のしるしとして、園児の服装史に一つの小さな足跡をとどめている。

子どもと衣服

幼稚園の制服

田中三保子

この四月から、長男が、三年保育の幼稚園に通うようになりました。毎朝、紺の帽子、白いブラウス、紺のサージの上下、お揃いのカバンというかっこうで出かけます。

幼稚園から息子が帰ってきますと、制服の手入れをしなくてはなりません。ブラウスは手洗いしませす。

帽子と上着にブラシをかけて汚れとほこりを払います。とくに大変なのはズボンです。一日はき続けているわけですから、日によってはドロドロです。汚れをもみ出し、ブラシをかけ、それでもおちないがんな汚れには、熱いお湯でしぼったタオルを使います。かくして、週末にはクリーニング店に走るようになります。こんな遊びざかり、よごしざかりの

子に、どうして制服が必要なのでしょう。なぜ私服ではいけないのでしょうか。それなら、どんなによごしても、たとえ裂けたとしても、全く問題はおこらないのに。

制服があれば、毎日何を着せるか、親が頭を悩ますことは少ないかもしれません。でも、私には、この「親が頭を悩ます」ことこそ、大事な家庭教育のひとつであって、それを放棄することは、家庭教育を放棄することに等しいという気がします。何を着せるかは、その日の気候・天候・場所・時等を考え合わせて決まるのです。そうした毎日のくり返しから、色彩感覚も養われるでしょうし、子どもの心には、例えば場所柄をわきまえた服装をすることが身についていくのではないのでしょうか。私服だと他の子と同じものを欲しがるからという主張も、理由にはならないと思います。親が子の要求をよしと思えば買えばよいし、できないのならそれを伝えるべきだからです。親の価値観、経済的状况等に見合った

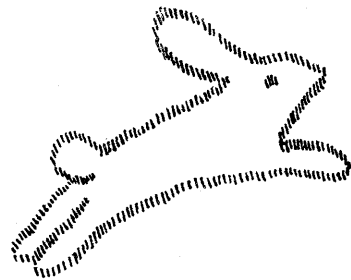
生き方を子どもに伝えていくのが、大切な家庭教育であって、服装にもそれが反映されるのが自然なことでしょう。こうした反復の結果として、分をわきまえた、その人らしい生き方をする人間が育つのだと思います。

入園当初、息子は朝、制服を着るのをとてもいやがりました。そして家に帰り着くなり、全部脱いでほっとした表情を見せていたものです。でも、二ヶ月も経つと、朝はすんなり制服を着て、そのまま出かけるまで遊びます。帰っても、放っておけばそのまま遊び出すようになりました。そんな様子を見るにつけ、親は複雑な思いにかられます。かといって、親の考えだけで、わずか三歳の子に、敢えて私服を着せて送り出す勇氣はとてもおきません。かくして、出るのはため息ばかりです。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

幼稚園の制服

蕪木寿江



「やつと四歳——、あこがれの幼稚園に入った」紺のスカートはいっぱしのお姉さんみたい、紺のズボンはしっかりしたお兄さんスタイル、誰にでも似合う紺と白の組合せが一段と清潔な感じがする。ついこの間まであぶちゃんをしていた子が一ぺんに大きくなったような喜びがある。お隣の〇ちゃんとも一緒の園服……仲間意識が生まれ、安堵感につながる。三人、四人……十人と並ぶと幼稚園の生徒になったんだなあという実感が湧く、家で

遊んでいる洋服の上にスモックを着せて登園させるよりは恰好がいい、しわくちゃなスモックはちょっと貧相な気がする、「〇〇幼稚園です」という誇りがある。センスのよい園服はその幼稚園の中味までよいような気がする。着ていく洋服について考えないでいいし、第一安直である。兄弟が着られて（ズボンは別だが）経済的である。女の子もおしゃれの競争をしないで済む、となかなかの好評。

「子供の生活は遊びそのものだから、特別制服をつくらなくてもいいのではないか。子供と言うものは何を着ても着なくても本来遊ぶ者である。その子に似合った服が着られるので私服の方がいい」などというもろもろの意見は父兄側からおそらく聞いたことがない。その幼稚園なりに考え、子供側に立っての考慮と信頼されているからなのだろうか。初めて出合う社会の一步から自分が選択をしない制服を着せられて、これでいいのかな、と始終頭のどこかにある。これが自由感を持った保育を目標にかかげている幼稚園であってよいのかと思う。ちがうからすばらしく、ちがうことが大切なんじゃあないか——と。

五十年の七月、ことばの発達のおくれているお子さんが大病院の紹介で見える。「幼稚園に行こう」と言うとき、さっさと靴を履いて嬉しがると言って、三十分近くかかる団地から、おんぶをして遊びに来た。やっと着いてすぐ帰る時もあり、一時間余りも遊びを見ているとき

があった。おんぶが一番安心の場所であり、おぶって走ると、「キャッキャッ」と声を立ててみそっぱをだして笑うようになった。六ヶ月の間、遊びに來たい時に来るようになり、先生方にも慣れ、ご両親の希望もあって十一月に入園した。「園服は無理に着せないで下さい」とあれほど念を押したのに、『よその子がいる』と言っていじめられるといけませんから』と言って着せたその朝、本人の相当な葛藤があったのだろう、五歳のひ弱な男の子が、その細い足でマンションのガラスを蹴飛ばして割り、怒り、非常な混乱状態なのできょうは休むという電話があった。この子の喜ぶことだけをしようとな家で理解し、感心するほど勉強していた親であったのに——。罪の意識にさいなまれていると一日おいてすぐに園服を着て見えた。よっぽど幼稚園に來たくて納得させられたのかしたのか、日に日に表情がでて子供らしく可愛くなってきた。

五十三年の十月、同じことばの治療教室からの紹介で

五歳の男の子が見える。どこの幼稚園へ行ってもことわられ、「こういう子がいると他の子供の教育に差し障りますから」と、三ヶ所の幼稚園で同じことを言われたとか、人間不信のような半ばあきらめたような口調であった。電車を二つ乗りついで遊びに来るようになり、次第に母子共、明るくなってきた。母親も世間話をしたり、園庭でお弁当を食べたり、部屋の中にも入ってきたり、帰ることを忘れてよく遊んだ。言葉はおおむがえしだが少しずつでっていた。専門家の先生ともよく連絡をとり指導を仰ぎながら三月に入園した。先の例もあり園服は着ないでもいいと話す、是非着せたい、本人が着たがっているし……と言うことで、サイズに合わせて手渡すと、お母さんはその園服を抱きしめて声をたてて泣いた。人前もはばかりず、「夢ではないか」「うちの子に本当に着せてもいいのか」といつまでも泣いていた。

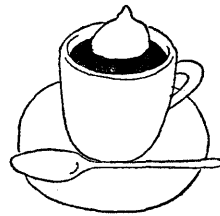
現在も同じような症状の子供がお母さんと一緒に通園している。人間がこわくて、家から一步も出られず、た

まに外へ行くときは下を向いて歩き、人に逢うと道路に頭がつく程腰を曲げていたそうだが、先ず、お母さんと一緒にいると安心——お兄ちゃんというと安心——お父さんというると安心——と、安心感の貯えが少しずつ増え、今では先生と一緒にいると安心と成長してきた。

先生と手をつないでいると友達の大勢いる砂場も平気、仲のよい友達もできて、「ぶつ」という動作で話しかけるようになった。『親指ひめ』の劇には蛙になりたいたいと言ってお面をつくり、先生の周りで跳ねている。蛙になると先生の手を掴んでいなくても両手を床につけて、両手でどしんどしんと高く飛ばす。(人間でいるより蛙の方が生活し易いのだろうか。)この男の子は園服を着ていない。着ることに抵抗があると言う。言葉話さない子が寧ろ本当の事をしゃべっているのか、「好きな洋服でいいですよ」とお母さんに話してある。「よその子」だと誰も言わない。この友達のおかげで、保育の原点とも言うべき人間本来の、「共に生きる」という輪が自然にひろがっている。(神奈川県・市が尾幼稚園)

神賀忠吾氏の世界 (II)

江波 諄子



四、はじめての作品

ある年の暮の夜、神賀さんから電話があった。声は弾んで、まるで子どものように生き生きしていた。もうすぐ新しい作品が出来上るといなのだ。どんな作品かの説明はなかったが、いつもの神賀さんの製作過程から想像するに、相当のエネルギーを費した結果のことである。神賀さんの高揚する気持が私にも伝わってきた。

その日の電話の主旨は、新しい作品が出来たら一番最

初に出来たものを、まこちゃんに届けますということであった。まこちゃんとは、その頃二歳で病気をしていた私の娘のことである。私は、この時、神賀さんから「人に親切にする、人を思いやる」ということ以上の大事なことをご教えられた。

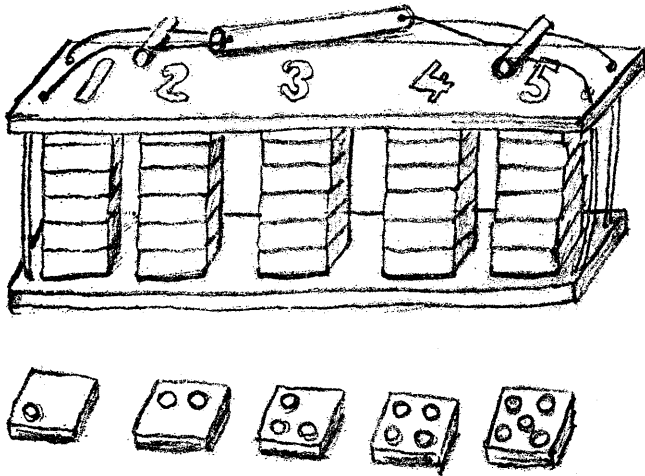
それは、神賀さんが何度も繰り返したように、「一番最初に出来たものでなければならぬ」ということについてである。手づくりの一番最初の作品といえば、誰にとっても忘れがたい一品である。そこには、これまでの

努力、迷い、思考、期待、不安、希望という道程を通り抜けて、はじめて形となってこの世に生まれ出たものであるからだ。確かに、はじめての作品には、多くのエネルギーがふぎこまれている。はじめてによせる気持は、到底二回目からとは、その緊張感も異なるだろう。このような人間の抽象的な思い入れが事実、客観的にどれだけ異なるかについて、あまり問題としない感覚の持ち主もある。日常の複雑な生活の中では、そのような繊細な感覚を忘れてしまうことも度々である。

しかし、目には見えないが、確かに思い入れが異なるはずだ。作った人のエネルギーの結晶ともいえるべき思い入れが、小さな人たちに伝わらないはずはない。いや、たとえ子どもがそのことを意識できなくとも、伝えることはできる。私たちは、子どもとの生活の中で、こうした真摯な思い入れこそ、大切にしていきたいものではないだろうか。

その作品は、なかなか数学的にも物理的にも深く考案された遊具で、次のようなものだった。

図 1



五、つみき

昨年、積木をテーマに卒論を書いているEさんと共に、神賀さんを訪れた。つみきについての神賀さんの考え方を、Eさんの卒論の中から紹介しよう。

〈木を楽しむ〉——神賀氏は、幼児の積木遊びは単に積木を並べたり積んだりするだけでなく、それ以前に幼児が木に触れて木のおいをかいたり、感触を楽しんだりするという経験がまず大事であるという。自然の中で生まれた木であるがゆえに、その他の人工物では得られないような幅広く奥深い体験を、幼児はすることができるといっているのである。つまり、木を積むという以前に、感覚的な体験をしながら遊ぶことができるのである。たとえば、木目にそって並べてみたり、木肌の色を区別して遊んだりするということが起こりうるわけである。木は自然が織りなしたものであるから単に見ているだけでもあきず、その変化を楽しむことができる。幼児に感じさせる場を与え、新しい感覚を

呼び起こすことになる。つまり、幼児期に好奇心や探求心を起こさせるきっかけを作ることになるという。これはプラスチックなどの積木では得られないことである。

〈木の種類〉——しかし、積木も木であれば何でもいというのではなく、木の材質そのものが大変重要となってくると神賀氏は述べている。木には多くの種類があつて、その材質の違いによって積木の与える効果が異なる。

では、どんな材質が積木として適しているのだろうか。神賀氏は、桜材こそが日本人に一番適し、又日本人が求めている材質であるという。それは、日本の住居をみると、昔から家の縁側、炉縁、敷居、床柱などに必ず桜材が使われていることからいえる。日常生活の中で常に触れているこれらに桜材を選んで使ったということは、日本人の好む感触が桜材とみているのではないかということである。

神賀氏は、日本人の好む材質ということで、桜材、

ほお材、もみじ材、けやき材の四種で子どもの玩具として自動車を作り、どれが自分の好きな車かという実験を多くの人に行っている。四台の車を被験者の前に置いて、重さ、感触、におい、木肌の色と自分がただ生理的に好む車を選んでもらうというものである。この結果、ほとんどの人が桜材でできた車を好んだという経験をしている。筆者も被験者となって上記の実験をやってみたが特にはっきりした理由を言葉で述べることはできなかったが、選んだ車が桜材のものであった。筆者自身不思議な気持ちであったが、無意識の下に生活の中で体得している感触なのかもしれない。

また、ほおのきも昔から日本人の生活の中にとけこんでいたので、恩物が初めて日本に入ってきた時は、ほおのきを使って作っていたらしいとも述べている。

しかし、以上の事は、だからといって桜材の他はすべてが不適當だというわけではない。どんなものに使ったら一番その材質が生きるかということが大切であるとも述べている。けやきやニレは、色がきれいで刺

激のあるにおいをもっている。障害児などの教育に、これらの刺激によって成長を促がすという目的をもって使う場合はよいであろうということである。

以上を要約すると、神賀氏は今日積木という形体だけが問題にされてその材質があまり考慮されていないので、もっと材質にも目を向けるべきであり、その材質が子どもに与える影響に意義をみい出してほしいと述べている。

〈神賀忠吾の積木〉——次に神賀氏の積木について述べてみる。積木の種類として、重箱つみき、たるつみき、車輪つみ木、自由つみきなどがある。

積木のセットの中には、正三角形を入れている。フレーベルの恩物は直角二等辺三角形であるが、一般に我々や幼児がとらえている三角形を考えると正三角形である。直角二等辺三角形はかたづけに合理的ではあるが、実質的に幼児が一番なじむ形として正三角形にしたという。また、球形は入れていない。球というのは幼児にとつてあまりに自由すぎるからであると

いう。つまり、幼児が自分で作動することができず、幼児の意志では、球を使いこなせないというわけである。

神賀氏の積木は、必ずしも積むということだけを目的としたのではなく、中央に穴があいている積木はまだ積んだりできない幼児が指を入れて遊べるようにも作られている。積木を積む時と、並べる時では使用する指が違うので、子どもの発達によっても与える積木に違いがあるとして、その大きさなどにも配慮している。

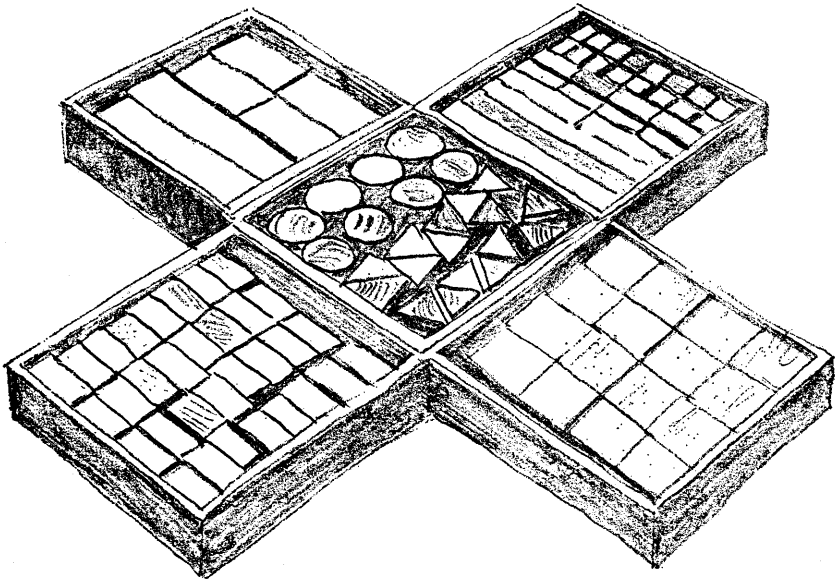
〈積木の数と大きさ〉——また、神賀氏は積木の条件として、数がたくさんあること、同じ形がたくさんあること、相似の形があることの三つをあげている。これらによって数学的概念を育てることができ、図形がどんなものかを幼い時に触れて感じることができ、数という概念も最初は一つとたくさんという区別から、徐々に細かくわかってくる。また、同じ形や相似のものがあることによって、等しいとか半分とかいう

概念も身についてくる。

手づくりの積木を専門的に創る場合、このように数学的な要素を積木づくりに取り入れ、単に適当に木を切つてつくればよいというものではないということとを指摘している。積木は正確につくられていなければ、幼児に正しい数学的概念を把握させることはできなく、積木の大きさに規律性がないと遊んでいても幼児はいらいらして落ちつかなくなってしまうからである。

手づくりの玩具は、作った人の暖かみが玩具を通して幼児に伝わるのでよいと評価されているが、積木のような玩具はさらに遊ぶことによって幼児にもたらす効果——この場合は数学的能力の発達を促がす——がなければならぬ。

現代は、とにかく「物」であればどんなものでもよいという考え方が主流をしめているが、かえって反動として手づくりのものが見直され、せめて子どもの玩具には手づくりのものを愛情こめてつくろうというこ



とがいわれている。神賀氏の玩具は、仕上げの最後の部分で玩具の表面や角にていねいに紙やすりをかけてつくられる。幼児が触れた時に何か感じとってほしいとの一念で、平面であるところも微妙な起伏を入れたり、細やかな配慮をしているとのことである。

このように、神賀氏の玩具、また積木はその材質から仕上げまで、それで遊ぶ子どもの個性や可能性を引き出すにはどのようにすればよいかということ、たえず考えながらつくられているものである。

神賀さんのつみきには、前述されたようにいくつかの種類があるが、ここでは、重箱つみきについて紹介してみることとする。

市販されているつみきと異なる点は、引用文中に述べられたことその他に、つみきを入れる箱が少しゆるやかにできているということである。箱の中にきちんとすべてのつみきが納まった時に、子どもの指が入るだけのわずかな空間が箱に残されている。この余白は、つみきを納

める時も、とり出す時も重要な空間になる。その上、つみきがすべて納まった時にも決して並べたつみきがくずれるということはない。

考えてみれば、この小さな余白がないために、幼児がはじめて箱から最初のひとつをとり出す時、ちよつとしたプラスチックンにかられる瞬間があったわけである。この余白は、最初のこのいらいらの気持を経験することをさせない。

つみきの材質について、つけ足すと、木には暖かいと感ずる木と冷たく感ずる木があるということも神賀さんが度々いわれることである。色、におい、感触、温度、重さなどそれぞれに異なる性質について、木を通して子どもたちの感性を呼びおこしたものである。

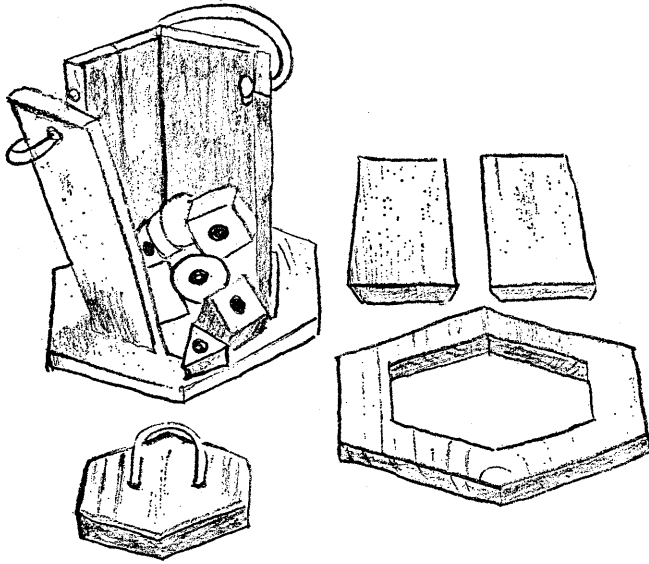
六、たるつみき

Eさんと神賀さんを訪れた日、そろそろ暇乞いをしようとする、神賀さんが手元に丁度あるといって、二つのたるつみきを持ってこられた。今日の記念に下さると

いうことでテーブルの上に二つ並べた。

神賀さんは、私にまず好きな方を選んで下さいといった。私は少々当惑した。つまり、どちらでもありがたく頂戴したいという常識的社会的通念が頭の中を占めていた。しかし、神賀さんは、それ以上の感性を要求してきつた。二つをよく観ると、同じ呼び名の玩具であるが、手づくりの木の作品である為、細かい点で微妙に違っている。それならばということで、私も常識的な立場を一端すて去り、自分の感性にどちらが好ましくうつるか問うてみた。やがて、AとBのうち、Aの方がよりよい作品と思えた。が、次の瞬間には、自分用にBを選び、「では、こちらをいただきます」といった。神賀さんは、どうしてBの方を選んだのか（つまりAの方がよい出来上りと思っているらしく）と尋ねた。私は申し上げにくかったが、Aの方がいいと思ったが、Eさんにそれをお渡ししたかったからと述べてようやく神賀さんに納得してもらったことがある。

そのたるつみきとは、次のようなものである。



夕方遅く帰宅して、子どもたちはめづらしいおもちゃに大はしゃぎだった。小学校低学年の子どもは、つみきを全部分解したあと、再び元の形に納めるのに、夕食前の一時間をかけた。その時のとりくみ方は、声の記録をテープにとっておきたい程興味深かった。

周囲の私達は、なるべくかけ声や、手助けしないで、何気なくふるまっていた。彼女は最初は、「こんなもの」とか「ちえ」とか荒々しい言葉を多く発していた。が、決して、あきらめて夕食の食卓につこうとしないのである。時々、祖母が夕食をすすめても、これが出来るまで絶対に夕食を食べないなどいい出した。傍で幼い妹がみているが、一人でとり組んでいる。

やがて、もうじき形を成すことが本人の意識にも周囲の目にもみえてくると、出す声の調子は柔らかくなり、作品にぶつける言葉でなく、自分自身への励ましの表現と変ってきた。小一時間とり組んで、元の形に納めた時、周囲の家族からそれ程賞讃された訳でもないのに、本人は大満足で夕食も勢いたくさん食べた。

その後は、コツをつかんだのか、又たとえ当初うまく元の形に出来なくても、自分は絶対にやれるという自信が湧いたのか、形をこわすのをもったいながる妹を横目に、「お姉ちゃんが絶対に元どおりにしてあげる」というのである。

中の小さな数あるつみきは、ままごとにもよく使われた。六角形の枠は、窓になったり、ふたをとった空洞は、その中を通して物をやりとりする通路にもなった忘れがたい作品である。

七、最後に

神賀さんの作品は、この他にも二十四種類程、銀座の松屋で紹介されている。

すぐに買い求められる作品は少なく、欲しい人が現われた時に、神賀さんがその人のことを思いやりながら製作するものがほとんどと思う。

ここで蛇足かも知れないが、作品に出会う時の私なりの心構えを述べさせてもらいたい。

まず、社会的通念などは一切忘れ、自分自身の感性をなるべく素直に呼びおこした上で作品に出会うことを薦める。

次に、一度に複数の作品と出会わないことであると思う。一つの作品のよさを十分に味わうには、それだけの時間とゆとりが必要である。神賀さんが、作品のパンフレットを嫌う気持のひとつもそこにあると考える。

私は平凡な自分の感性で、出会いは一度に一品だとしてつくづく思った。なぜかといえば、それは、当然ある人の感性が、別の人の感性と出会う時、製作者のこの一品に費したエネルギーを考えれば、それに応え得る感性を、私たちは一作品以上に持ち合わせていないからである。

神賀さんが、自分の作品が商品的になるのを嫌うことを理解するならば、私たちもゆっくり、じっくりと自らの感性を投じて作品に出会うことではないだろうか。

|| 了 ||

(常磐女子短期大学)

宗教人類学からみた子ども ①

怪物の話

関一敏



大学に入った頃、「非日常」という言葉があたりを飛びかっていた。タテカンやビラ、雑誌、テレビ、本のミニコミからマスコミにいたるメディアのあちこちで「非日常」にぶつかった。それは「失われた世界の復権」(山口昌男の名はこの論文名とともに初めて知った)と

して、祭や政治運動、演劇、詩、生活のさまざまな領域での何か革命的な、あるいは超越的なものの到来を意味するものようであった。しかし、どうしても分らないのは「非日常」という言葉がたんなるアジでないとするれば、それが何を一体意味して用いられているのか、そもそもこの概念に何かいいところがあるのかという笑うべき疑問だった。だから次の一節には、祭のことを考えはじめた大学院時代の思いのたけをこめて傍線をひくことになった——「これまでの祭理論の弱点であった『非日常』の解釈のあいまい性と、さらに、時間論との関係において祭のなかの矛盾の併存をみとめようとした多くの説の不十分さ……」(柳川啓一「祭にひそむ二つの原理」『公評』一九七三・九)。あいまい性と不十分さは、今もさして変わらない気がする。ただ、十九の春を「非日常」という言葉にもっていかれたこちらとしては、もう少し具体的に、もう少し論理的に、ということはあるに「非日常」を物語ってみなければおさまりがつかないのだ。

畸形の動物や人間たちは何処からやってくるのか。この問いかけは、十九世紀近代畸形学の胚胎成立以前に数多くの博物誌、医学誌的著作を生んできた。なかでも十六世紀フランスは実り豊かな畸形と怪物論の時代として、さまざまな動物分類論、怪物原因論、図版集を残している。

そのなかの一冊に『怪物と不思議』と題する一五七三年の本がある。ヴァロア朝末期の王室外科医、アムプロワーズ・パレ（一五〇九―九〇）の作品である。版ごとに増補改訂を重ね、生前は四版（一五八五）を最終稿とした。現在入手しうる校訂本も四版の復刊である（Am-broise Paré, *Des Monstres et Prodiges*, éd. critique et commentée par Jean Céard, Genève, 1971）。全三十八章に図版八〇余枚を配した一種の図鑑であり、校訂者はこれをパレの「絵本」とよんでいる。絵本とはいえ、あるいは絵本の名にふさわしく、内容はなまなかのもので

はない。パレの眼をとおして時代のフランス文化が「畸形」「怪物」の概念にくくりあげた人間や動物たちの姿態が、その身体的変形、部分結合、異種混合の因果論とともに陳列されている。異常形態の神学的・医学的原因がことこまかに分類説明されている叙述のあり方は、むしろ因果、漸とよぶべきかもしれない（二―三三章）。パレの蒐集範囲は、想像上のものとも実在動物の伝承の変形ともつかない陸・海・空の巨大生物にまでおよぶ（三四―三六章）。これら異世界（アフリカ・アジア）に棲息するとされる怪物にはワニ・サイ・ゾウ・カメレオン・キリン・ダチョウ・鯨などが含まれていて、その博物誌的知識のもつ世界への広がりと限界をあらわにしている。

2

パレによって分類された怪物原因論のしくみをみてみよう。（一）は章立てである。

- (1) 神の栄光を讃えるため
- (二)
- (2) 神の忿怒を表わすため
- (三)

- (3) 精液の過剰(四―七)
- (4) 精液の不足(八)
- (5) 母親の想像力(九)
- (6) 母胎の狭窄(十)
- (7) 母親の姿勢(十一)
- (8) 母胎へのショック(十二)
- (9) 遺伝・偶発事故(十三―十七)
- (10) 腐爛(十八)
- (11) 精液混交(十九)
- (12) エセ異常(二〇―二四)
- (13) 悪霊(二五―三三)

一見して実に雑然とした配列であり、パレの分類原理にはいくつかの異なった系がいりまじっている印象をうける。これをかりに三つに分けると、超自然的(1)(2)(3)、自然的(3)~(11)、人工的(12)ということになる。われわれの目からすれば、この三類型にパレの三つの顔を、つまり神学者・医者・道徳家のそれぞれを割りふってみたい気がする。校注者セアールによれば、パレの分

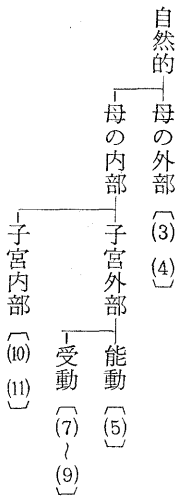
類にはかならずしも網羅的な狙いはなく、怪物誕生には複数の原因が同時にかかりうるものとみなされていた(「序文」)。たとえば一二五四年イタリアのヴェローネで記録された人頭馬身の「動物」は「神の怒り」(三章)の産物であると同時に、「精液の混交」(一九章)の結果でもある。また男となって魔女と交わる魔魔のしわざ(二八章)は、同時に消化不良の肉と強いワインが神経組織を狂わせた結果として医学的見地からも説明されている(三三章)。つまり「ヒポクラテスのいうように病気には人智のおよばぬ何か神聖なものがあり」(59頁)、「驚嘆すべき隠された神性が怪物にはみいだされる」(68頁)のだが、そうした超自然的な働きはいっぽう自然的原因によっても説明しうるものとみなされるのである。このことは、自然の働きがその背後にある超自然の意志を反映するというパレの一元的宇宙観をものがたるものだろうか。異種動物間の交わりは神の怒りをよび、それにふさわしい怪物を生むというふうだ。しかし、とすれば人工的怪物とは何を意味するのか。三四章以下の陸海空の巨

大生物は何のために列挙され、また自然的怪物(3)~(11)の諸項目の配列はどう考えればよいのだろうか。

3

まず(3)~(11)の自然的・原因の配列をみてみよう。精液の男性原因と母胎の女性原理が順不同に並べられているようにみえる。精液の項目をみると、(3)過剰・(4)過少・(11)混交の三つがある。精液の過剰は胎児の身体的過剰を生み、過少は身体的欠損を生む。前者にはシヤム双生児、双頭の女性、腹にもうひとつの頭をはやした男、半陰陽、男に変性してしまった女、後者には体の一部(四肢・頭)を欠いて生まれた男女のさまざまなバリエーションがあげられている。量的な多寡に加えて、清液の混交は異種複合の異常形態を生む。半人半獣(人と犬、人と馬、人と豚)や異種結合体(ニワトリと犬)がその例である。これらの三原因はそれぞれに対応した結果としての怪物の三形態を生む、とパレは考えていた。怪物の形態学(「怪物形象はどのように組みあわされるのだろうか

か?)であるならば、十八世紀博物学者デュッフォンの三法則は右のパレの原因論に呼応しているだろう。いわく、「過剰」、「欠如」、「部分の転倒もしくは誤れる配置」。けれどもパレの博物学は形態学的分類に自らを縮少することなく、形象からその生成原理にさかのぼろうとしていた。この胎生の因果法則ともいうべきパレの志向は、(3)~(11)の一見バラバラな項目配置にもよくあらわれている。校注者セラールは別の本で、精液の三項目のうち(11)混交だけが何故うしろにまわされているのかと問い、それは外から内へと移行するパレの視点の動きではないかという(J. Géard, *La Nature et les prodiges*, Genève, 1977, p. 306)。



つまり女性の体を中心にして、外からくる諸原因から内在する原因へと順次におしすすむパレの眼の動きがこ

ここにあらわれている。内から外へ、子宮から産道へ、そして外部の現実世界へと生みだされる怪物の産出行程は、こうして遡行的に外から内へと入りこむように解剖される。パレにあってこの運動は、徴候から病をよみとる医学的解読と、現象から神意へとむかう神学的解読を重ねあわせるものであるだろう。

4

しかしながら、パレの科学と神学は一方が他方をすっぽり包みこむ同心円を構成していたといいきることは難しい。両者はむしろ楕円の二つの中心のように引きあい、分離しようとしていた。超自然がつねに自然を媒介として自然において神意をあらわすとすれば、超自然の表出に不可欠なものとして自然が認識の前面へとおしだされ、やがて自然そのものの驚異が超自然を置き去りにする離脱運動へといたる。事実パレの生きた十六世紀は、宗教改革と印刷術の発明普及という社会文化史的大変動期にあって、神の不思議が自然の驚異へとその意味

づけを変えつつある時代だった。宗教改革初期にあって神の恩寵の印とみなされていた自然変異（地震・噴火・洪水・天空奇瑞・血の雨・石の雨）や怪物の誕生は、十七世紀において小伝統的民衆文化をのぞいて自然そのものの不思議とみなされはじめていた。大伝統は小伝統を迷信視しつつ、「神意の究極因」よりも「自然科学的説明」によって「意志をもった自律的存在」としての自然をとらえようとしていた（K. Park & L.J. Daston, "Unnatural Conceptions", *Past and Present*, n° 92, 1981, 8, pp. 23-435）。この趨勢はさらに自然のまどっていった「超自然的オーラ」をとりのぞき、読者を驚かせ楽しませる趣向を生む。パーク&ダストンによれば、これこそがパレの本の末尾に陸海空の狂奇な生き物博物誌の収められた理由にほかならない。すなわち「興味の世俗化」である。パレ自身、次のようにいう。「実のところ私はといえば、自然はその造形の偉大さをわれわれに驚嘆せしむるために戯れたのだ、というほかない」（一三九頁）。

パレの科学と神学はこうして自然現象の究極因を自然

そのものにもとめるか、あるいは背後の超自然にもとめるかという二つの運動を示している。ここで注目したいのは、そのいずれにおいてもパレの怪物への関心が自然現象の調和性への信頼にもとづいていることである。すでにみたように怪物の形態はその原因類型に照応し、原因の類型はそこに想定された規範的秩序からの逸脱として考えられている。過剰、欠如、変形、混交は宇宙の（時として神の、時として自然の）調和的規範を破るものであり、そうした規範的法則（自然法則、道德法則）や規範的種類からの逸脱もしくは侵犯は、規範的身体の逸脱としてあらわれざるをえないのだ。こうしてパレの怪物論がその調和的宇宙観とうらおもての関係にあることは、じつはこれまでふれなかつた非自然的な二つの怪物原因（人工的・超自然的）のとらえ方にいっそう明らかである。

5

人工的原因には畸形や病をかたる乞食・放浪者の例が

あげられて、パレはこれを激しく批判していた。たとえば首吊りの屍体から切りとった腕を肩からぶらぶらさげて腕が腐ったようにみせていた男（二〇章）、乳房にニセの腫れものをつけた女乞食（二一章）やニセ癩病患者（二二章）、尻からインチキなはらわたを出した男（二三章）など。これらの人工的怪物は追放・処刑にふさわしいとするパレの批判には呵責ない激しさがこめられている。正常の宇宙調和が神意の（もしくは自然の）意志の反映であるならば、異常の存在もまた逸脱としての神の（もしくは自然的）意味をもつものである。これを人間が作為的に模写することは、したがって神（もしくは自然）の冒瀆であり、調和的種類の意図的攪乱であるのみならず怪物的形象のもつ意味をもそこなうものである。

この主張は、超自然的原因のなかで魔物と魔女のとらえ方に再現されている。デモンもまた神の恩寵・忿怒にもとづくはずの異常出産を作為的に模写する者たちである。「サルは滑稽で子供にとつてはすてきな存在であり、笑いの気晴しになる。人間のふるまいを真似ようとして

それが出来ずに、しかも見る人々を嘲笑うようにみえる」。セラールはこの一節をパレの他の著作から引いたうえで、エセ乞食やデモンにたいするパレの強い否定感情には、「ものまねへの恐怖」があるという（「序文」43頁）。デモンが忌避されるのは、人間にも動物にも化けられるような流動的な身体をもち、幻を現実ととりちがえさせる「神のサル」のあり方である。さらに魔女といえはこのデモンをサルまねするのだから、それこそ「神のサル」のサル」という二重のサル性を帯びることになる（45頁）。

デモンの否定は、だから神／デモン＝善／悪という道徳的二分法によるのではない。神もまた怒りによって不幸をもたらし、兆としての怪物をこの世に誕生させるだろう。問題は神意にもとづく不幸や変異にはそれなりの理由があつて、人智にはかり知れぬ面をもつとしても宇宙の神義的調和はたしかに保証されていることだ。ところがデモンはこの調和をパロディによって揺さぶり突きくずす。あるいはこう言いかえてもよい。デモンはやは

り悪である。何故なら、それは規範と分類の網の目をサルまねによって攪乱し、境界性を不明確なものにしてしまふのだから。あるいはこうもいえるだろう。時代の百科全書の知識の拡大は旧来の動物分類に収まりきれない生き物の情報をもたらす。パレの試みはこれらの怪物によって崩壊の危機に瀕する宇宙的調和観を医学的な知をもって再建することだった。この試みを最も阻害するのは、始末におえない畸形や怪物形象そのものではなく、本当の異常とウソの異常をまぜこぜにしてしまう人間やデモンの作為だった、というふうに。してみると、パレのサル批判には個人と時代の嗜好では片づけられない根源的な意味が考えられるはずである。何故、動物分類を逸脱する怪物よりも、逸脱を模倣する攪乱が悪とみなされるのか。

6

ここでわれわれは、デュルケムとモス『分類の未開形態』（一九九三）以来の民族学的課題である「分類」の

問題にひきこまれることになる。動物分類についていえば、たとえばE・R・リーチ（『言語の人類学的側面』、『現代思想』一九七六・三）とP・ブーイサク（『サーカス』せりか書房、一九七七）を読みくらべることで、分類の逸脱部分のタブー原理と、分類体系そのものを攪乱するサーカスの動物芸のしくみを知ることができる。ここでは動物たちの命名、衣裳、ふるまいによって動物の人間化が演じられる。人間／動物を隔離するところに成り立つ動物園のシステムがその時代と社会にふさわしい差異の分類体系を集約しているとすれば、サーカスの動物芸は異種間横断的な結合原理によってサルまねの攪乱をひきおこすのである（同一一―一六六頁）。

怪物と分類の話は、リーチのいうように魔女信仰の社会史へとわれわれをひきよせもすれば、中沢新一が物語るように文化の胎生学へと一気に突きぬけさせもする（『ゴジラの来迎』、『中央公論』一九八三・十二）。今回の話は、けれどもこのあたりでしめくくらなければならぬ。感想をひとつ付け加えておこう。

出産の「異常」についてはさまざまな文化の博物誌、民族誌、民俗誌が積み重ねられてきた。怪物的形態ではなく、出産過程の例として、逆子、歯の生えた子供、生まれる時に排泄する子供、双子……。双子の問題は記号的には差異を混乱する要素として、サルまねの恐怖を生ずる出来事としてとらえられよう。してみると、もっとも恐ろしい存在は、過程の異常が形態の異常とともにやってくることで、つまり双子の怪物ということではないだろうか。

〓この項終り〓

（筑波大学）

著者紹介　せき・かずとし　フランス、ベルギーをフィールドとして活躍する新進の宗教人類学者。幽霊研究会のメンバーでもあり、近年は、日本の神霊現象にも着手。本連載を「通じ、聖母、子ども、騒霊の息吹を、存在と仮象の渦巻く、あなたこなたから、時を超え、国を越えて届けていただきます。」

近代短歌に現われた子ども（十九）



大塚 雅彦

(41) 病者の歌

明治以降の近代・現代歌人の作品を子ども詠にしほって個別に見続けてきた。戦後短歌史に一時期を劃した「新歌人集団」の人々まで考察してきたわけだが、このグループの人々も既に皆、古稀前後の年齒を迎えている。その後、歌壇に登場して現在活躍中の歌人は、数限りなく多い。前衛短歌々人などというものも現われている。それらの現役歌人たちの誰を選ぶかとなると迷わざるを得ないし、また、歴史的評価が未だ定着していない向きもあるであろう。そこで個人別はこの辺でとどめ、プロ歌人というよりも、むしろ民衆歌人・庶民歌人の作品ともいふべきものを、幾つかの面で集団的にとりあげ、この長くなった連載を完結する

ことにしよう。むろん、民衆歌人の中にも新聞歌壇に時に投稿する程度のいふなれば無名歌人から、結社に属して歌歴も長く、やや知られた歌人も居る。以下にとりあげるのは、それらを含めて社会的に或る群を成していたり、或る特殊な社会的存在であることを余儀なくされていたりして、現代社会の持つ酷薄な或る断面を短歌によって鋭く提示し、短歌が単に花鳥風月を詠するだけでなく、現代社会生活を営むさまざまな人々のうったえを端的に表現するものであることを示す作品群である。

(イ) 『試歩路』

病者には歌を詠む人が多い。これは作歌によって、病床の苦しみや闘病のせつなさを支える慰藉や活力を得ている人々が世に少なくないからである。病者は短歌結社誌、新聞、一般雑誌等に投稿を続けたり、あるいは歌集を出す人もかなりいる。しかし全国にわたって広く病者一般から作品を集めた歌集というものは、意外に少ない。『試歩路』(昭29・12)はそうしたことに応えて、全

国の療養者に呼びかけて作品を集め、年刊療養歌集として刊行したもので、その意味で珍らしいものである。全国の病院や療養所等から多くの所内歌誌や病者歌集が集まった。集まった歌稿は数名の中堅歌人に委嘱して編さんするたて前であったが、本書は主として前掲の中野菊夫が代表としてその衝に当たった。そして掲載作家一千十三名、作品三千九百三十一首が本書に収められた。患者は結核とハンセン氏病(癩)の二つのそれが多いようである(その理由等については歌誌「地表」昭34・4月号所収、拙稿「歌集『試歩路』について」)。結核は戦前は死病といわれたが、戦後は治療の進歩により怖い病気ではなくなった。しかし本書刊行の昭和二十九年度の結核による傷病人員数は、厚生省の調べによると約六百万人であり、これは全種類の病気の傷病人員数の約二割四分強になっていたものであり、やはり相当の数である。ハンセン氏病患者の短歌は、それだけを集めたすぐれた歌集『木がくれの実』(昭28)、『陸の中の鳥』(昭31)等がこの前後に刊行されたので後述に譲り、ここでは主とし

て『試歩路』の中の結核患者の短歌だけについて見たい。なお、療養歌集はこれを皮切りに毎年刊行される予定になっていたらしいが、その後『無影燈』が出ただけで中絶してしまつたようである。

①わが袖にすがりて離さぬ幼子にすぐに癒ゆるとなだめ出で来し（広島療・河内格）

②軽い気持でと長男はいひ二郎無言三郎四郎はさよならといふ（小原療・高田喜好）

①は入院時をうたったものだろう。長期療養を覚悟して、すがるとの悲しい別れ。②は、やや大きな子ども達だろう。四人の男の子の態度が入院する父に対してそれぞれに違うのが、巧みに描き分けられている。かすかなニューモアすら漂よっているが、それゆえにむしろ哀切感が深い。

③抱きあげしこともなき吾子と別れ来てひとり療養所
行の車待ち居り（小諸療・大島世宗）

これは入院していた作者が自宅に行き、再び病院に戻る折のことを詠じたものらしい。「抱きあげしこともな

き吾子」という語が、この作者の長い闘病を語っているようである。

④久々に帰りに見れば暮れて灯のなき間に吾子はぽつねんと居る（佐倉療・高橋喜美枝）

この一時帰宅は一層懐愴である。この作者は他の歌によると、夫に死別し、七周忌が近づいてもなお、この娘と離れて病院で暮しているらしい。

⑤「肺病の子と遊ばない」と言はれ来し子を背に妻は行商にゆく（有珠鉄道病・中谷寅雄）

⑥雨の夜キャバレーに出でてゆく妻を子は井戸端に立ち見てをり（再春荘・松本東邦）

⑦行商も立ちゆきませぬと泣く妻を子は見守りてをり遊びをやめて（同右）

⑧肺病の子とのしられ杉垣に顔をかくして吾子は泣きある（庄内療・丸山政雄）

⑨一枚の涙紙をうけむさぼりて絵を描くわが子孤児園に見き（久里浜療・湯沢淳）

いずれも患者の妻や子のみじめなさまが描出されてい

る。⑤の妻も⑥の妻も共に行商をし、後者は⑦の歌の如く行商では生計が立たないのでキャバレー勤めに出たのだらう。しかも⑤の妻は子を背負って行商をし、⑥⑦の妻は「遊びをやめて」母を見る子どもを置いて、生計に奮闘せねばならないのだ。⑤と⑧の子どもは共に「肺病やみの子」と友人仲間に罵られている。⑨の子どもは一層みじめで、自分は孤児園に、父は療養所に居るのだ。高度成長時代以前の世相を背景にしている、社会保障も今ほど進んでいなかったと仮定しても、長期療養者の子どもの悲惨は、読者の胸をしめつける。

⑩子の笑ふ声する家にともる灯を個室の窓よりあかず
見つむる（聖テレジア療・伊東節子）

⑪病みてより子に逢はぬこと久しくて抱ける重みもお
ぼろになりぬ（新潟療・畑山正人）

共に子どもと長く断絶されている悲愁を抑えてうたっている。

⑫今更に墮胎せし子を欲しといふ妻は身弱き吾に迫る

も（武蔵野療園・斎藤宗一郎）

⑬眠りたる如き子の顔と思ひつつ小さき柩に釘打ちに
けり（下志津病・三井重春）

子どもも安心して生めないことが⑫でわかる。この歌の作者夫妻は離婚するに至っているようである。病の上に貧も加わっているのかもしれない。⑬は愛児の死をうたう。

⑭大人のみのこの病室に小児結核の佐藤文栄が母恋ひ
て泣く（加茂病・高橋哲也）

⑮病廊に今日も血を売る少女をり一人はうつむき一人
は笑みて（松本療・中野貫司）

⑯は、人の子の親が見れば胸つぶれる光景である。この病児を見つめる病室の大人たちも皆病んでいるのだ。

⑰はまた悲惨な情景だ。こんなことがあるのだろうか。

共に結核病棟の中の子どもの或る姿をとらえ、不幸が増幅されているのをえがく。

⑱たまさかに逢ひし吾が子がせがまれし短き童話に病
む身疲るる（宮城療・高橋敏子）

⑲久々に訪ね来し子になにもなければ療園の蟬とりて

与ふる（漆山莊・松浦双鳥）

⑧見舞来し吾子を吾が抱き丘に坐し夕暮るるまで其の儘に居つ（富士療・望月楠雄）

⑨山みちを歩みて来しと云ふ吾子の小さき鼻の汗ふきやりぬ（広島療・山本千恵子）

⑩寄り添ひて吾がゐる安らぎに夫の背に会ひに来し吾子はいびき立て初む（愛媛療・渡部富美子）

いずれも面会に来た幼児との逢いがうたわれている。病棟に相見る親子像のさまざまな姿に、私は重い感慨にふけらざるを得ない。そして

⑪子の手を引き癒えたる友は帰りゆく公孫樹もみぢの明るき下を（帖佐療・太田雄三）

の退院の歌に、僅かに愁眉をひらく思いにいたるのである。医療扶助や生活保護の断たれたことや断たれるおそれをうたう作品も集中にはある。福祉の充実と向上を希わずには居られない。明治以降の近代文学者たちの「死因ベスト5」は癌・結核・自殺・肺炎・脳出血の順であることを、私は或る本で読んだことがある（佐川章

『文学忌歳時記』（昭57・10）が、医療の進んだこんにちでも、文学者ばかりか、名も無き多くの民衆も、結核のみならずさまざまな病苦に呻吟し、罪なき子ども達もその不幸の影響を背負わされていることを、私は忘れたい。

（口） 小川正子 『小島の春』

数ある病いの中でも特にその症状の無惨さにおいて、また病気のもつ性格の特殊性において、ライ病は戦前では業病のごとくいわれた。ライ歌人として知られる明石海人はその歌集『白描』の扉の冒頭において「癩は天刑である。加はる答の一つ一つに、嗚咽し慟哭しあるひは呻吟しながら、私は苦患の闇をかき搜って一縷の光を渴き求めた」と述べている。歴史的にも、中国では孔子がライを病む伯牛を見舞って魔訶病と歎いた話があったえられ、わが国ではライを病む武将大谷吉継が、石田三成との友情のために関ヶ原の戦に出陣して陣没した話のこっている。また、バイブルにはライ病に関する記述が実

に多い。大移動する民族の中にライ病患者が多かったことが推察されるのである。私が子どもの頃、縁日に行くと、鼻の欠けた乞食のような人物が路傍で錢を乞う光景をしばしば見かけたが、今思えばそれはライを病む者であつたにちがいない。その後医学が進みプロミンのような良薬が開発されたり、療養所への保護收容政策が進んで、街頭などでライ患者を見かけることはなくなつた。しかし、この進歩の蔭には献身的にこの病のためにはたらし、貢献したすぐれた医師や社会事業家の存在があつたことを、忘れてはならないだろう。小川正子女史はその一人である。

女史は山梨県の東山梨郡春日居村に明治三十五年生まれた。母くには東京女高師出身の女丈夫型の女性だつたという。正子は甲府高女（現甲府西高）を経て、東京女子医専（現東京女子医大）を昭和四年卒業した（人物近代女性史「女の一生」8『人類愛に捧げた生涯』へ昭59・3）所収、阿部光子「小川正子」による）。卒業後、

ライ病院である多摩全生園や瀬戸内海の長島愛生園に就

職を希望したが容れられぬ中、昭和七年突然愛生園に現われた。直接談判による就職で、家族を強引に納得させたものという。爾来、ライ治療史では慈父といわれた有名な光田健輔園長の指導を受けつつ、九州・中国・四国等の山深く隠れ住むライ患者を探して歴訪し、愛生園に收容する精力的な活動を開始する。そして、園長の勧めでその旅行記を書きとめて、園誌に発表し、後にそれをまとめて刊行したのが『小島の春』である。この本は昭和十三年十一月刊であるが、ベストセラーになり、私の持っているものは十五年八月で改訂第六刷を重ねている。更にこの十五年には豊田四郎監督・夏川静江主演で映画化され、感動を巻き起した。私は当時旧制高校生であつたがこの本を購読した映画を見て、ショックともいふべき感銘を受け、私がライ病に関してその後深い関心を抱くに至る最初のキッカケとなつた。しかし、当局のライ対策は時局と共にこの頃から温和な方法でなく峻烈となり、「浮浪ライ」の「狩りこみ」が始まり、例えば十五年七月熊本県警は本妙寺集落を急襲し、ライ病者を

検査し、全国の療養所に分散して送りこみ、ライ集落を焼き払うような暴挙を敢えてした。戦時中は栄養不足や空襲による壕生活で、入園患者の死亡が急増するようになる。一方、正子女史は過労のため肺結核となり、昭和十四年郷里に戻って療養したが、十八年四月、遂に起らず四十二歳の生涯を終った。出身地の村の仏念寺に葬られている（阿部光子、前掲書）。『小島の春』が世人に与えた大きな功績は、ライは人々が信じて来たように遺伝ではなく伝染病であること、従って患者を療養所に送って治療すれば、家族や近隣への伝染を防げること等を教えた点にあるといえよう。なお、ライとこの文を私は書き続けてきたが、実はこの病気はノルウエーのハンセンによるライ菌の発見によって、こんにちではハンセン氏病と呼ばれていること周知の如くである。『小島の春』はヒューマン・ドキュメントともいべき文集であるが、集中の短歌を若干見よう。

① 病む父を持てればか此の児幼くて物のわかりのよろしき児なり

② その母も児も亦病むと吾は診たり診つつ歎かふ深く来つること

③ 夫と妻が親とその子が生き別る悲しき病世に無からしめ

④ たづね来てのぼる石みち幼な子を抱きて立てる療友を見出でつ

⑤ 癩患者の児といふ子らの我が前に眼そらせて立つにいとしさ湧くも

⑥ 幼なきに寂しき笑顔する子らの裸抱へて吾が診たりけり

⑦ 病児のためによき事と云へ親心幾日悩みてありしをおもふ

女史は医師として山を越え谷を渡り、人里離れた奥にも入って行き、村びとの指弾を怖れてひそかに隠れ住む患者や、この病気の危険さを深刻に感じていない患者を発見し、検診し、療養所に入ることをすすめる。病む父を持つ幼な子のあわれさが詠まれている①や④の歌。母と共に子も同じ病いを病んでいることに愕き胸を突かれ

る②の思い。そして、子どもを隔離收容することがよいことは患者はわかっていながら、不憫がって手離すことをためらって長く悩んだに違いない、とその親の苦悩を思いやる⑦の歌。いよいよ收容に同意して病気の肉親を送り出す折の、残る者との別れ。もう一生帰って来ないかもしれないのだ、愛別離苦の悲しみは、病者とその家族だけに一層深い。「こんな悲しい別れを招くような病気はこの世に無くなってほしい」と念願する著者の思いをこめた③。この③の歌は後に有名になった。⑤と⑥は瀬戸内海の島での啓蒙・医学宣伝活動の一環の歌である。つまり小学校で子ども達の一斉検診をしたのである。「何も知らない私の前に眼を外らせて立つ子がある」と、それは大抵の場合に癩者の子か、その血族の子だと云ふ事が示される事であつた」と著者は書いているが、そんな子どもたちを哀れにもいとしくも思って診ている医師である作者の心情がにじんでいる作品である。

⑦なかなか人に集まらぬ校庭に子らまぢかねてさばぎ
てゐるも

⑧ 映写光の中に子等のび上り手をうつし頭うつしてよろこびてをり

⑨ 金浦の児らの笑顔を忘れかねいささかの菓子贈りてやるも

⑦と⑧は癩に関する啓蒙映画を校庭で見せる野外映画である。村童たちの無邪気な様子が眼に見えるように、その動作がとらえられている。⑨は一斉検診をした金浦集落の児童たちがあまり可愛かったので、後で菓子を贈ったのだろう。やさしい女医さんだ。

⑩ 道草を食べたべしつつ学校へ山越えて行く子等に遭ひにけり

⑪ からたちの垣に花咲き花かげに朝のうつはを子が洗いをり

⑫ 学校の行くさ帰るさの子供等に道辺の桃は叩かれにけり

患者捜索・救出行の旅の途中の、こんな行きずりの子どもの姿もうたわれている。そのことがこの女医の心情の豊かさを自ら示しているようである。(この項未完)

公立の中学校へ、私服で通学しようとする生徒をめぐって、小さな事件が報道されたことがあった。確か、制服着用を入学時に条件化している私学とは異なり

「校服」は、着用が望ましいという程度の規制力しか持たず、従って、その生徒は、校則違反というほどのことではなく、精々、「みんなとちがって目立つ」という程度の逸脱に過ぎなかったようだ。にもかかわらず、学校側の妨害(?)は、目に余るものがあつたらしい。脅迫に近いほどの強い注意をくり返す教師陣に加えて、父兄たちまで「私服反対」を決議したという。

この事件は、単なる制服の可否を超えて、わが国の教育界の体質を、よくも悪くも鮮やかに露呈している。「みんなが同じ」であることを、教育効果と考える傾向、「決められたことは絶対に守るべきだ」とする形式的真面目主義、そし

て、何よりも、子どもたち一人一人の多様なあり方を、「当たり前のこととして」自然に受けとめることの極端に下手な大人たちの特性であろう。

それぞれが、それぞれらしくあることが当然であるなら、「逸脱行為」などというものはそれほど多発しない筈なのだが、みんなが一斉に同じであることが期待されるから、その人がその人として行為するとき、それは「逸脱」と指導される。私服をめぐるあのトラブルは、こうしたありようの、見える形の現われであったのだ。

『人と人の間』という、木村敏氏の名著がある。日本人は「私という」自我を中心とせず、むしろ「間」を中心に置くという。これは、日本人の存在様式が優れて「関係的」であるという指摘なのだが最近の大人と子ども関係の硬化化は、一体、何を物語っているのだろうか。(H)

幼児の教育 第八十三巻 第十号

十月号 ⑦

定価三〇〇円

昭和五十九年 九月二十五日 印刷

昭和五十九年 十月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 編行人 本 田 和 子

東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

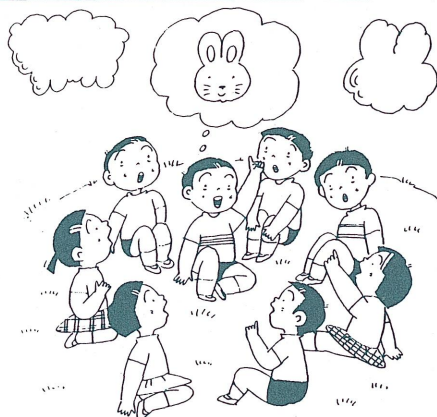
園外保育 その準備と進め方

仲田安津子・著

新刊!!

園外保育の
ガイドブック
誕生!

園外保育の準備から当日の活動の進め方までを園行事の代表的な遠足を中心に紹介しております。
子どもよろこぶ遊びを多数紹介。



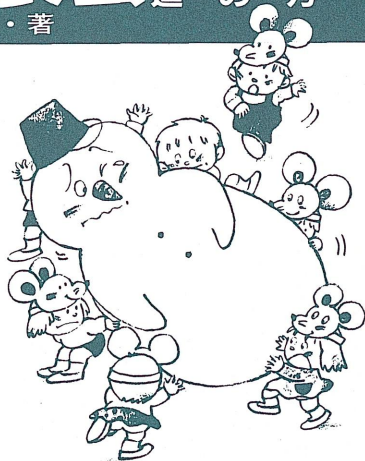
A 5判・200頁・定価1,400円

幼児のための発表会 その準備と進め方

館 紅・著

新刊!!

本書は、はじめて「発表会」に取り組む先生のために発表会の基本的な考え方、出演種目の決め方、脚本の選び方、スケジュールの立て方、保育者同志の協力のしかたを詳説してあります。
☆著者脚色の脚本を9編紹介。



A 5判・216頁・定価1,500円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

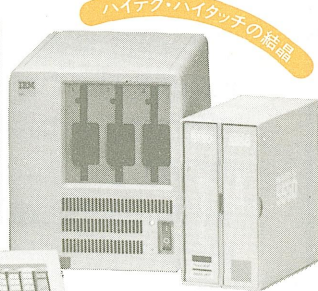
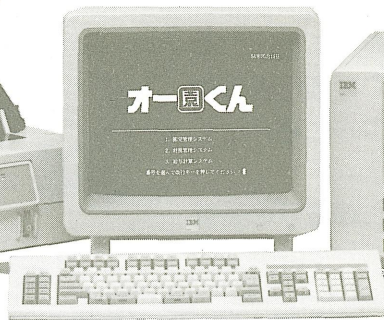
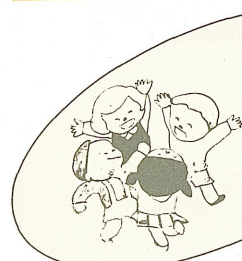
子どもの心を大切に 子どもの明日を考える
センターブツの

フレーベル館

近代的な園経営の実現をお約束します！

幼稚園・保育園用 フレーベル コンピュータ システム

オー園くん



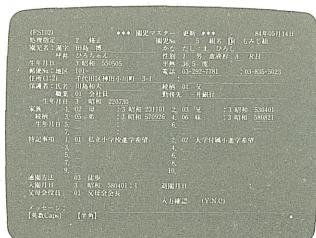
ハイテク・ハイタッチの結晶

オー園くん新登場

省力化でゆとりの園経営を実現します。
本格的コンピュータ・システム **オー園くん**

OA(オフィス・オートメーション)時代といわれます。しかし、オートメーションが求められているのは企業のオフィスだけではありません。園児の減少、人件費・施設維持費の上昇などの状況の変化は、幼稚園・保育園に経営の効率化、事務のオートメーション化を求めています。経営の近代化がはかれればそれだけ幼児教育の充実、園のイメージアップなどに力を注ぐことができるようになります。日ごろから先生がたと親しくおつきあいをさせていただいているフレーベル館では、みなさまの園経営を積極的にお手伝いできるコンピュータ・システムとして「オー園くん」を開発いたしましたので、ぜひご活用ください。

専門知識はいりません。
初めての方もカンタンに操作できます。



- 操作の方法は画面が指示してくれれます。
- まちがっても安心、画面が教えてくれます。
- わずかな練習で操作を覚えてしまいます。

●目にやさしいグリーンイエローの画面。

☆'83「日経・年間優秀製品賞」、「最優秀賞」受賞。

IBMマルチステーション
5550

- コンピュータはIBMマルチステーション5550。
- 園用ソフトウェアはフレーベル館・凸版印刷・トッパンムアビジネシステムズの共同開発。

オー園くんは、月々わずか4万円(税別)から。
すぐあなたの園の優秀なスタッフとして活躍します。

タイプ	価格	リース価格
オー園くんタイプⅠ	¥1,820,000	月40,000円(5年)
オー園くんタイプⅡ	¥2,026,000	月44,500円(5年)

オー園くん仕様

		オー園くんタイプⅠ	オー園くんタイプⅡ	
ハード	システム・ユニット	16ビット、マイクロ・プロセッサ 主記憶容量 ROM16KB RAM384KB ディスク3ドライブ		
	ディスプレイ	画面サイズ	12インチ	15インチ
		文字構成	16×16ドット	24×24ドット
	プリンタ	16×16ドット	24×24ドット	
	キーボード	JIS標準ひらがな配列		
ソフトウェア	園児管理システム	名簿管理、出欠管理、体位・体力測定管理、おもいでファイル、修了台帳、未就園児名簿、宛名印刷、園児情報検索等		
	財務管理システム	資金収支日計表、試算表、資金収支計算書、現金出納帳、当座預金出納帳、総勘定元帳等(幼稚園用・保育園用)		
	給与管理システム	月次給与、賞与、年末調整		
ワープロシステム	文節変換、訂正、挿入、削除、移動、枠あけ、罫線、倍角・半角文字等の各種機能			

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心を大切に 子どもの明日を考える

キンダーブックの

フレーベル館